

カシキアコムでの自由学芸

——初期アウグスティヌスと学問——

水落健治

1 序

紀元三八六年一月上旬〜三八七年四月下旬、ミラノでの回心を経験したアウグスティヌスは、ミラノ近郊のカシキアコムにある文法学者ウエレクンドゥスの別荘に滞在し、友人や弟子との対話の中にカシキアコム対話編や自由学芸の書物を執筆した。

この半年足らずの期間に行われた知的営為がいかなるものであったかについての研究は、これまで、もっぱらA・V・ハルナックが提起した「アウグスティヌスの回心につ

いての論争」との関連で行われて来た。だがこの事態は、一九七五年と一九九〇年に発見された新書簡・新説教の出現によって新たな局面を迎えたといつてよい。

たとえば、バレアル諸島在住の信徒コンセンティウスからアウグスティヌス宛てに執筆された『書簡一一*』（四一九年）は『告白』に記されたアウグスティヌス像と現実のアウグスティヌスの姿との間に存する乖離の存在を予測させるし、『書簡一二*』（四二八年）では、すでにペラギウス論争を終え、「恩恵博士」*doctor gratiae* としての名声を轟かせていた晩年のアウグスティヌスが、異教作家であるキケロやカトーの言葉を引用しつつ、異教起源の修辞学

の学習を若者に積極的に奨励する姿が見出される。⁽³⁾

新書簡の発見は、『告白』に描き出されるアウグスティヌス像が必ずしも歴史上のアウグスティヌスと一致するとはいえないことを明らかにしたのである。

そこで今回の発表では、かかる事態を踏まえた上で、カシキアコムで行われた自由学芸を媒介とする真理探求がいかなるものであったのかを、『告白』に依拠することなく明らかにしたい。具体的には、カシキアコムで執筆された『秩序』第一巻、『書簡二六』に収録されているリケンティウスの詩、および『音楽論』を手がかりにすることとする。

2 カシキアコムでの生活

2・1 「自由な閑暇」“otium liberum”

紀元三八六年八月、ミラノでの回心を経験したアウグスティヌスは、洗礼を受けるまでの半年の間(三八六年一月月上旬〜三八七年四月下旬)にわたって、家族(母モニカ、息子アデオダトゥス、従兄弟ラスティディアヌスとルスティクス)、親しい友人(アリピウス)、ふたりの弟子(リケン

ティウス、トリゲティウス)を伴ってミラノ近郊カシキアコム Cassiacum にある文法学者ウレクンドゥスの山荘 villa に滞在した。

ここでの「世の煩いを離れて親しい仲間と学問や哲学に専念する」という生活は、「自由な閑暇」“otium liberum”⁽⁴⁾の伝統に連なるもので、キケロのトゥスクルムでの談義に象徴されるように、古代知識人のひとつの理想の生活形態であった。四世紀末、異教徒の元老院議員たちは、興り来るキリスト教を見やりつつ、シケリア島の広大な庭園に隠遁して異教古典の写本の校訂に時を費やした⁽⁵⁾、哲学者ポリピュリオスは、アリストテレス理解をめぐるプロティノスとの確執から逃れてやって来た同じシケリア島で、『イサゴージェ』Isagoge、『キリスト教徒を駁す』Contra Christianos を執筆した⁽⁶⁾。これらの生活は、時には行政当局等によって大規模な地域共同体として計画されることもあった。プロティノスが市当局の協力のもとに計画した「プラトンの町」Πλατωνόπολις と呼ばれる哲学者の町⁽⁷⁾や、アウグスティヌスの壮年期に引退知事ダルダヌスがフランス東南部 Bases-Alpes に建設しようとしたキリスト教徒の「神の町」Theopolis⁽⁸⁾などはこれに該当する。

ミラノ郊外にアンブロシウスの指導のもとに形成された修道院⁽⁹⁾もこの脈絡で捉えられよう。

アウグステイヌスは、回心以前からこの「自由な閑暇」を念願していた。彼が親友アリピウスらと希求した「わづらいのない閑暇のうちにかつ愛知の内に生きる⁽¹⁰⁾」という生活、また彼がパトロンであるロマニアヌスおよび十人の仲間と共に実現しようと試みながら婦人たちの問題のゆえに実現しなかった閑暇の独身共同生活⁽¹¹⁾は、この伝統に連なると考えられるからである。

アウグステイヌスは、ミラノの回心の後、二人目の愛人を離別し、若き婚約者との婚約を破棄して独身者となり⁽¹²⁾、胸部の病を得て修辞学教師を辞職したが、それを契機として、かねてよりの念願であった「自由な閑暇」の生活に入ったのである。

2・2 ウェレクンドゥス

アウグステイティヌスらに山荘を提供したウェレクンドゥス *Verecundus* は、アウグステイヌスの親友ネブリディウスの教えを受けて以来の親しい友人⁽¹³⁾であり、ローマ市民

で文法学者⁽¹⁶⁾であった。カシキアコムに広大な山荘を有していたことからすると、裕福な家系の出身だったのかもしれない。彼は、ミラノ宮廷を中心とする知識人サークルに属するアウグステイヌスの同業者で、文法学者として修辞学者アウグステイヌスとは仕事上きわめて密接な関係にあったのみならず、キリスト教との関係においてもアウグステイヌスと似た状況にあった。すなわち、彼自身はキリスト教徒ではなかったが、キリスト教徒の妻を娶っており⁽¹⁸⁾、キリスト教徒になるなら、アウグステイヌスらと同様に独身者となりたいと願っていたのである⁽¹⁹⁾。このように、カシキアコムでの生活は、仕事上でも心情的にもアウグステイヌスにきめて近いウェレクンドゥスの存在を得てはじめて実現された。

2・3 山荘での生活

豊かな自然に囲まれたカシキアコムでの静かな生活は、まさに「自由な閑暇」の生活であった。日の出と共に起床した人々の生活は、アウグステイヌスの朝の祈りから始まり⁽²¹⁾、時には、「太陽が昇って明るくなると、……皆で草原

を散策する⁽²²⁾こともあった。日中は、農夫たちと農作業をしたりもしたが、生活の中心は討論に置かれていた。人々は、天気の良い日には、「草原の決まった場所に降りていて討論⁽²³⁾」したり、「いつも行く樹の下に腰を下ろして対話⁽²⁴⁾」したりし、天気の良い日には、浴場が議論の会場となった。⁽²⁵⁾

討論は、ほんのちよつとした出来事が契機となることもあり、たとえば、浴場の前で鶏が喧嘩をするのを観察し、それをきっかけに思索が始まったり、夜、浴室の背後を流れる水の音がきっかけとなって、議論が始まったりした。⁽²⁶⁾

そこでの生活は、アウグスティヌスが日常的に祈りをささげていたとの記述⁽²⁷⁾から、宗教的側面をも有していたと推察される。だが、その一方で、ここではウエルギリウスの詩が愛好され、集った人々は食事の前に彼の詩を半巻朗読したり、また討論を行わない日々には、彼の詩三巻を一日中読んだり学んだりした。⁽²⁸⁾

当時のアウグスティヌスは肺を病んでいたため討論は時折、彼の病んだ肺をいたわるために中断された。また討論が行われず、アウグスティヌスが一日の大部分を手紙を書くことに費やした日もあった。⁽²⁹⁾このようなとき、参加者たちは、自由学芸などを各自独習したと考えられる。

2・4 自由学芸

カシキアコムでの生活は、半年近くにわたって(三八六年一月月上旬〜三八七年四月下旬)続いた。アウグスティヌスは、ここでの生活の中で、いわゆるカシキアコム対話篇——『アカデミア派駁論』 *Contra Academicos*、『至福の生』 *De beata vita*、『秩序』 *De ordine* ——を執筆し、『独語録』 *Soliloquia* を書き上げる。前者は、カシキアコムでの生活が始められたばかりの三八六年一月中旬の討論を反映して比較的短い期間に書き上げられ、後者は、翌年春頃に執筆されたと考えられている。⁽³⁰⁾

さらにアウグスティヌスは、この生活の中で、文法学、問答法、修辞学、音楽、幾何学、算術、哲学といった自由学芸の書物を書き始める。⁽³¹⁾彼はその理由を、

当時生活を共にし、このような学びを毛嫌いしてはいなかった人々との議論によって、物的なものも媒介として、いわば確実に一步一步昇って行きながら、非物的なものにまで到達し、彼らをそこにまで導いて

行く

『訂正録』一・六〇

という点に求めているが、この言葉からすると、彼が自由学芸の書物を書き始めた理由はカシキアムでの議論に存していたことが分かる。いわゆる「カシキアム対話篇」が伝えるのは、そこでの生活が始まった二週間足らずの間に行われた議論であるが、半年近くに及んだカシキアムの生活では、これらの対話篇に記されていない様々な議論が行われ、そこでの議論のいわば「教材」として自由学芸の著作が書き始められたと考えられるのである。⁽³⁹⁾

以下われわれは、『秩序』第二巻の自由学芸論を見ることによって、アウグスティヌスがカシキアムで書こうとしていた自由学芸の書物の構想を明らかにし、次いで、『書簡二六』に収録されているリケンティウスの詩と『音楽について』を考察することによって、その性格を明らかにしたい。

3 『秩序』第二巻の自由学芸論

3・1 自由学芸論の意図

『秩序』は、アウグスティヌスが「すべての善と悪を保持するのは神の秩序であるか」という問題を論じようとしてた著作である。だが彼は、この事項を論じることがきわめて困難であることを認識したので、むしろ学の秩序について書こうと考え、生徒がいかなる仕方でも物的なものから非物的なものへと進んで行くかを書こうとした。⁽⁴⁰⁾ この目的のために彼がもつとも有益だと考えたのが自由学芸であり、彼はこの自由学芸の概要を、人間の理性 *ratio* の上昇課程として『秩序』二・一二・三五—一九・四八で述べた。⁽⁴¹⁾ したがって、『秩序』第二巻における自由学芸についての記述は、彼がカシキアムで書こうとしていた自由学芸の著作の構想を提示したものと考えられる。

この記述のうちでまず注目すべきことは、自由学芸の諸学が

1 「生活の必要のために学ばれるもの」

2 「事物の認識と観想のために学ばれるもの」

に区分されていることである(二・一六・四四)。元来自由学芸は、理論的諸学(=「事物の認識と観想のために学ばれるもの」)より成り立つものであるが、ここに実践的諸学(=「生活の必要のために学ばれるもの」)が付加されていることの背後には、何らかの具体的な学問体系が念頭に置かれていると考えられるからである。

この区分によって念頭に置かれているのは、ウァロ Marcus Terentius Varro (前一六〜二七)『諸学芸の書』 *Discipline* (二・⁴²16) の書は、文法学 *grammatica*、問答法 *dialectica*、修辞学 *retorica*、音楽 *musica*、算術 *arithmetica*、幾何学 *geometrica* といった理論的諸学に、占星術・天文学 *astrologia*、薬学 *medicina*、建築学 *architectura* といった実践的諸学を加えて実用に供しようとするものであったが、アウグスティヌスは、この書を念頭に置きつつ、これを彼独自の「物体的なものを媒介として非物体的なものへ」(『訂正録』一・六)という目的に向けて変容させて独自の自由学芸の書物を執筆しよう

とした。

アウグスティヌスが『秩序』二・二二・三五―二・一八・四八で明示的に述べている学は、文法学 *grammatica*、問答法 *dialectica*、修辞学 *retorica*、音楽 *musica*、幾何学 *geometrica*、天文学 *astrologia*、哲学 *philosophia* の七つである。これらの諸学の名称をウァロの掲げる名称と対比させると、アウグスティヌスの意図が見えて来る。

1 アウグスティヌスは、ウァロが掲げている諸学のうち、算術、薬学、建築術を掲げていない。これらのうち算術は、諸学芸の始まりについて述べる『秩序』二・二二・三五において「数えることの有用性」 *utilitas numerandi*、「計算を教える者の職務」 *calculus professoris* という語によって実質的に含意されている。だが、薬学、建築術については掲げられていない。その理由は、それらが「生活の必要のために学ばれる学」だからと考えられる。

2 彼は他方、ウァロが掲げていない哲学を自由学芸として掲げている。哲学は、すでにティベリウス帝(在位一四〜三七)の時代に自由学芸の位置を占めており、

またヒエロニムスも哲学を自由学芸に加えていたが、⁽⁴⁶⁾
 アウグスティヌスが哲学を自由学芸として掲げているのは、これら外的理由にもとづくのではなく、哲学が「事物の認識と観想のために学ばれる学」として諸学問の環を完成すると考えていたからである。⁽⁴⁷⁾

要するに、アウグスティヌスは、実学を排除し、哲学を選択することによって、「物体的なものを媒介として非物体的なものへ」という意図を実現しようとしたのである。

3・2 自由学芸の諸段階

われわれは以下、個々の学について、『秩序』が語る所を見て行こう。

1 非物体的なものに向かって上昇しようとする人間の理性が学ばなければならない第一の学科は文法学 *grammatica* である。文法学は、お互いの魂を感じ取れない人間が、感覚を通訳 *interpretes* のように用いてお互いの魂を結合させようとして産み出した「意

味表示する音」 *significantes sonus* と、これを保存するために作り出した「文字」 *littera* とを扱う学であり、読み書き *litteratio* の部門と文学 *litteratura* の部門とに区分される。

「読み書き」の部門は、いわば文法学の幼児期 *grammaticae infantia* であり、この部門を教える者は「文字を教える者」 *librarius* と呼ばれる。ここでは、音素 *littera* (母音、子音、半母音)、音節 *syllaba*、言葉の八つの類 (|| 品詞)、韻律などが扱われる。⁽⁴⁸⁾

「文学」の部門は、「何であれ記憶に値するものとして文字に委ねられたもの」すべてを扱う部門であり、歴史学 *historia* もこれに属する。アウグスティヌスはこれを「ことがらとしては無限・多様である学問」、「⁽⁴⁹⁾楽しみや真理よりも労苦に満ちた学問」と呼んでいる。この部門を教える者は、文法学者 *grammaticus*、歴史家 *historicus* という名で呼ばれているが、*A. Wilmanns* は、その内実を汲んで「文献学者」 *philologus* という名をこれに与えている。⁽⁵⁰⁾

2 文法学を学んだ理性が次に赴くのは、問答法 *dialectica* である。問答法は、「それによって学芸を産んだ

力の探求と考察」*quaerere atque attendere hanc ipsam vim, qua peperit artem* とされ、定義、分類、総合、虚偽の防止をみずからの課題とする。問答法はまた、「教えることを教え、学ぶことを教える」学と述べられている。⁽⁵²⁾

Marrou は、アウグスティヌスの問答法が、(一) 思考(論理) 法則の学と (二) 議論の学の側面をもつことを語っているが、問答法のこの二側面が、『秩序』の記述にも現れている。

3 だが人間は、問答法によって何かを教えられても、真理に従わず、自らの感覚や習慣に従うのが常である。そこでそのような人間を動かす *commovere* 必要から、修辞学 *retorica* が考案された。修辞学は、人間の魂をただ教えるだけでなく、それを動かし喜ばせ、自らが有益と考える所へと人々を導くことを職務とする。⁽⁵⁴⁾ 問答法を学んだ理性は、次にこの段階に到達しなければならぬ。

4 これらの三学 *trium* を身につけた理性は「肉眼なしに見つめることができる美」を欲求する。だが物體的物事に慣れ親しんだ理性は、感覚に妨げられる。

そこで理性は、物體的物事における美の現れをいわば「階梯」とし、それらを媒介として段階的に非物體的なものへと上昇することを求める。音楽 *musica* は、「耳の領域」における美の現れを扱う学である。

音楽はまず、音の種類(生物の声における音、楽器の中の息が発する音、叩くことによって発せられる音)を区別する。そしてそれらの素材が、一定の時間の比率と音程の程よい多様さによって形作られなければならないものになること、文法学で扱われる韻脚やアクセントがここに由来することを認識する。そして、韻脚を一定の秩序に従って配置・結合して、それらを「行」*versus*、「中断点」*caesa* な「句」*membra* と名づけ、これらを扱うことになった。⁽⁵⁵⁾

5 人間の理性は、耳の領域に属する音楽になじんだのち、「眼の働き」*oculorum opes* と呼ばれる幾何学 *geometrica* へと赴く。理性は、自らが氣にいるものが美であること、美の内では氣にいるのが形であること、形の内では氣にいることが比例であること、比例の内では氣にいるものが数であることを感知する。そして肉眼が見る図形から知性認識が捉える線や円、他の形や図

形を区別し、知性認識が捉える図形を学の形に還元して「幾何学」と呼んだ。⁽⁵⁶⁾

6 そこから理性は、天文学 *astrologia* へと赴く。理性は、「天の運動」*motus caeli*、「寸分たがわぬ季節の交代」*constantissimae temporum nices*、「星の定まった規則的な軌道」*astrorum rati definitivae cursus*、「星相互間のふさわしい距離」*intervalorum spatia moderata* を観察し、これらを支配しているものもまた比例と数に他ならないことを理解する。そして理性はこれらの現象を定義・区分してひとつの秩序にまとめ、天文学を生み出した。

ここで掲げられる「*astrologia*」は、「天文学」(「天体の運行を研究する学」と「占星術」(「天体の運行の知識を人間の運命に適応する学」)の意味をもつ語である。⁽⁵⁷⁾だが *De ord.* では、この語はもっぱら天文学の意味に用いられている。アウグスティヌスは『告白』七・六・八〜一〇で、占星術の迷妄について語っているが、彼が *astrologia* を天文学の意味で用いる背景には、このような占星術の迷妄を拒絶する彼の姿がある。

7 人間の理性は、この段階にまで至ったとき、諸学芸の最高段階である哲学 *philosophia* に昇ることができる。アウグスティヌスは、哲学の二つの部分を次のように区別している。

第一の部分は魂についてのものであり、第二の部分は神についてのものである。第一の部分は私たちが自分自身を知るようにさせ、第二の部分は、私たちの根源を知るようにさせる。前者は私たちに、私たちが幸福にする。前者は学びの途上にある者に、後者はすでに学んだ者にふさわしい。〔秩序〕二・一八・四七⁽⁵⁸⁾

こうして人間の理性は、物体的事物を扱う文法から天文学に至る自由学芸の諸段階を経ることによって、哲学の対象である非物體的な「魂」と「神」を認識するに至る。アウグスティヌスは、このような文法から哲学に至る上昇課程によって「物體的なものを媒介として非物體的なもの

へ」という道程を描き出したのであった。

3・3 『秩序』第二巻の自由学芸論とウァロ

『秩序』第二巻の自由学芸の記述には、ウァロの痕跡が様々な形で見い出される。彼の著作は現在完全な形では残っていないが、その著作、特に『諸学芸』*Discipline*の影響は極めて広範囲に及んだため、多くの著作家が時には“Varro”の名称と共にその教説に言及し、その結果われわれは、それらの箇所とアウグスティヌスのテキストとを比較することによって、アウグスティヌスにおけるウァロの影響を知ることができる。われわれは以下、Fischer (p.14-18) が掲げる四点を指摘しておきたい。

3・3・1 自由学芸が「生活の必要のために学ばれるもの」と「事物の認識と観想のために学ばれるもの」とに区分されていること

第一に、アウグスティヌスが自由学芸を(一)「生活の必要のために学ばれるもの」と(二)「事物の認識と観想

のために学ばれるもの」とに区分していることの背後には、ウァロの『諸学芸の書』*Discipline*がある。このことについてはすでに詳述した(p.5f. 参照)。

3・3・2 文法学を *litteratio* と *litteratura* とに区分していること

またアウグスティヌスは、『秩序』二・一二・三五〜三七で文法学を「読み書き」*litteratio* の部門と「文学」*litteratura* の部門とに区分している。

これはいわば文法学の幼児期であり、ウァロはこれを「読み書き」と呼んでいる。だがこれがギリシア語でどう呼ばれるのかについては、今は十分に思い出せない。(二・一二・三五)

いまや文法学が完成されたが、それはみずからの名称によって「自分の職務は文字である」と叫んだので——ラテン語の「文学」もここに由来する——記憶に値するものとして文字に委ねられたものは何であれ、必然的

に文法学に属することとなった。(二・一一・二七)

ここでアウグスティヌスは、ウァロに従い、「文法学の幼児期」 *grammaticae infantia* を「読み書き」 *litteratio* と名づけ、文法学の完成形態を「文学」 *litteratura* と呼び、それらのギリシア語の名称を想起しようとしている。

だがここで彼が想起しようとしているギリシア語の名称は、マルティアヌス・カペラ(五世紀)『文献学とメルクリウスの結婚』 *De nuptiis Philologiae et Mercurii*: III, 229 に明示的に述べられている。マルティアヌスは、この書の多くの箇所でもウァロを称讃し、自らの教説の多くの部分をウァロ『諸学芸』から取り入れている。そしてその第三巻の問答法に関する記述は、幾つかの重要な点でアウグスティヌス『問答法』と合致し、両者が共通の資料に基づいて執筆されたことを示している。⁽⁵⁹⁾

わたし(文法学)はギリシア語で『*poimatai*』と呼ばれるが、それは、線が『*poimn*』と、文字(音楽)が『*poimnata*』と名づけられるからである。そして、様々な文字の形をふさわしい線によって描くことはわ

たしに課せられたものである。ここから、ロムルスは「文学」 *Litteratura* という名前をわたしに与えた。

ただしロムルスは幼児であったわたしを「読み書き」 *Litteratio* と呼ぼうとしたが、それは、わたしもともとギリシア人のもので『*poimnatai*』と呼ばれていたのと同様である。そのときロムルスは、主人を与えると共に、年若い侍従を従わせたのであった。⁽⁶⁰⁾

この記述は、F. Ritschl (*Ritschii Opusc.* III, p.358) がウァロに由来することを示した箇所である。文法学はここでもふたつの部門に区分され、第一の部門が「アウグスティヌスにおいてと同様に——「幼児」 *infans* にたとえられて *litteratio* と呼ばれるとともに、第二の部分が *litteratura* と呼ばれている。そしてアウグスティヌスが想起しようとしていた両部門のギリシア語の名称が、それぞれ『*poimnatai*』、『*poimnatai*』という名称で示され、両部門の関係が、侍従と主人の関係になぞらえられている。

この区分は、それがフィロンにも現れていることからすると、ギリシア世界ではかなり一般的なものであり、それがウァロによってラテン語の世界にもたらされたものと考

えられる。

また、書くこと、読むことは、人々が派生的に「*paun-
nartotukn*」と呼ぶ不完全な文法学の課題であり、詩
人や歴史家のもとにある書物の解説は、一層完全な
「*paunartukn*」に属する。

〔教育のための闘い〕一四一〇⁽⁶¹⁾

Fischer は、『秩序』一・一二・三五以下以上にアウグス
ティヌスの文法学の教説の起源を明瞭に示す箇所はない、
と語っているが、われわれは、この箇所とマルティアヌス
との比較によって、文法学の二部門の区分がウァロに由来
するものであることを知ることができるのである。

3・3・3 音楽 *musica* における「行」versus の

語源的説明

第三に、アウグスティヌスは、「音楽」に関する記述の
中で、韻律を有する詩句の起源について述べ、韻律におけ
る「行」versus の語源を「折り返し」*revertere* に求め

ている。

そして理性は、言葉それ自体においても、音節の長さ、
短かさがほとんど等しい大きさで文 *oratio* の中に分
散していることに容易に気づいたので、かの韻脚を一
定の秩序に配置し結合しようとした。そして、この第
一のもの（韻脚の配置）においては感覚それ自体に従
い、中間の結節点 *articulus* を定め、これらを中斷
点 *caesa* ないし句 *membra* と名づけた。また、韻
脚の連続がそれを識別できる以上に長く続かないよう
に、折り返し *revertere* の限度を定め、それをこの
語 (*revertere*) から「行」versus と呼んだ。(一・
一四・四〇)

しかるに、マリウス・ウィクトリヌスは、同一の語源的
説明をウァロのものとして紹介している。

「行」versus とは、ウァロが好んだところによれば、
語 *verba* の結合であり、結節点 *articulus* や句
commata、またリズムを介して韻脚 *pedes* へと転

移 modulari するものことである。……だが、この名称もまた派生的に用いられよう。ギリシア人たちの「行」versus、英雄的五脚韻 herous hexameter は「叙事詩」epos と呼ばれるが、これも純粹かつ固有の意味に於いてだからである。だがわれわれにおいては、「行」versus と呼ばれるのは「折り返し」versura という語から、すなわち、そこで止まる部分よりなる繰り返された語の集合 scriptura からである。というのも、ある人々が認める所では、原初の時代には、人々は、左の部分から始めて右の部分へと続け、続く行を右の部分から初めて左の部分へと続ける、という仕方を書くのが常だったからである。そして彼らは、この習慣を守ることを、みずからの粗野な文字に於いてなおも続けた。⁽⁸⁾

われわれは、この説明からも『秩序』二巻の記述がウァロに基づいていることを知ることができよう。⁽⁹⁾

3・3・4 幾何学を「眼の働き」opes oculorum と呼んでいること

第四に、「幾何学」が「眼の働き」opes oculorum と呼ばれていることも、ウァロの影響を示すものと考えられる。『秩序』二・一五・四二の幾何学の記述は次のように始まっている。

「理性は」ここから「眼の働き」へと進み、天地を俯瞰して、自らの氣に在るものが美にほかならないこと、美においては図形にほかならないこと、図形においては比例にほかならないこと、比例においては数にほかならないことを感知した。(二・一五・四二)

ここで唐突に現れる「眼の働き」という語は、この語が読者にとって既知の専門用語であったことを予測させる。

しかるに、ゲリウス『アッティカの夜』Gellius, *Noctes Atticae* 一六・一八では、「測定の学」とでも呼ばれるべき広義の“geometria”が「眼の学」*opticki* (＝幾何学)。

「耳の学」 *καυουικη* (=和声学)、「韻律論」 *μετρικη* の三部門に区分され、この区分に関連してウァロの名が掲げられている。⁽⁶⁵⁾

幾何学のひとつの部分、眼に属する部分は *οπτικη* と呼ばれる。もうひとつの部分、耳に属する部分は *καυουικη* と呼ばれ、音楽家はみずからの学の基盤としてこの部分を用いる。……そして *καυουικη* にはもうひとつの種もあり、これは *μετρικη* と呼ばれる。ウァロは語っている、「だがわれわれはこれを全く学ばないか、……」⁽⁶⁶⁾

われわれは、この記述からもまた、*De ord.* 第二巻の自由学芸に関する記述がウァロに根差していることを知ることができよう。

4 リケンティウスの詩 —— 『書簡二六』

以上われわれは『秩序』第二巻の記述を見ることによつて、アウグステイヌスがカシキアクムにおいて抱いていた

自由学芸の構想とそこにおけるウァロの痕跡を見てきた。そこでわれわれは次に、アウグステイヌス『書簡二六』に残されているリケンティウスの詩に眼を向けることにしよう。ここでは、カシキアクムにおいて行われた真理探求の具体的カリキュラムが述べられているからである。

詩の作者であるリケンティウスは、音やリズムに敏感な、情熱的な詩人であり、カシキアクムでは、他のことがらに注意を払わなくなるほどに詩や韻律の研究に熱中していた。だが彼は、そこでのアウグステイヌスらの薫陶により、自由学芸の学習を始め、キリスト教徒となり、⁽⁶⁷⁾ アウグステイヌスらがアフリカに戻ってからミラノに留まってその学習を続けた。だがその学習はあまり進歩しなかった。そこで彼は、カシキアクムでの生活から八年後(三九五五年)、⁽⁶⁸⁾ 五脚韻一五四行よりなる一篇の詩をアフリカのアウグステイヌスに宛てて送り、ウァロの至高の教説が師アウグステイヌスの解釈なしには不明瞭であると述べ、詩の末尾で、アウグステイヌスが執筆した自由学芸の著作の一冊である『音楽について』*De musica* を自らのもとに送ってくれるよう要請した。⁽⁶⁹⁾ これがわれわれの見ようとする詩である。この詩は、ラテン語の古形などをを用いたきわめて凝った

もので、その文体は、A.K. Clarke によれば、「アレクサン
 ドリアからイタリアにやっ来てラテン文学の「銀の時代」
 を築いた詩人クラウディアヌス Claudianus (四〇〇頃)
 の影響を受けたものであった。(73) Clarke は、「クラウディア
 ヌスが三九五年以前の数年間ミラノに滞在し、おそらくは
 リケンティウスと同じ知識人サークルに属していたことを
 指摘しているが、もしこの見解が正しいとすると、リケン
 ティウスは、アウグスティヌスがアフリカに帰国した後も
 詩作の学習を—自由学芸の学習とともに—続け、ミラノの
 知識人サークルでクラウディアヌスと出会ってみずからの
 詩作の技法を洗練させていったことになる。

いずれにせよリケンティウスの詩は、カシキアクムから
 八年後のリケンティウスがいかなる仕方でも自由学芸や詩作
 を学んでいたかを示していると同時に、その限りで、彼の
 自由学芸や詩作の学習の出発点をも示していると考えられ
 る。(76) そしてその記述は、それがリケンティウスによって書
 かれたものであるがゆえに、カシキアクムとそれに続く時
 代について、アウグスティヌスの記述とは異なった側面を
 われわれに示してくれると考えられるのである。

リケンティウスの詩はこう始まっている。(75)

Arcanum Varronis iter scrutando profundi
 Mens hebet, adversamque fugit conterrita

lucem.

Nec mirum; iacet omnis enim mea cura
 legendi.

Te non dante manum et consurgere sola
 veretur.

5
 Nam simul ut perplexa viri compendia tanti
 Volvere suasit amor, sacrosque attingere
 sensus.

Quis numerum dedit ille tonis mundumque
 Tonanti.

Disseruit canere, et paries agitare choreas,
 Implicuit nostrum varia caligine pectus.

10
 Induxitque animo rerum violentia nubem.

Inde figurarum positas in pulvere formas
 Posco amens aliasque graves offendo teneb-

ras.

Ad summam astrorum causas clarosque
meatus,

Obscuros quorum ille situs per nublia mon-
strat.

密やかなる、深みに到るウァロの道を探り求めつ
つ、

「わが」精神はぼやけ、粉碎され、逆光を避けて
いる。

驚くにもあたらぬ。わが書物への思いは放置され
たまま、

あなたの助けの手なくして、ひとり立ち上がるこ
とを恐れている。

なぜなら、かくも偉大なる人「Varro」の入り組
んだ綱要を

巻き広げ、聖なる思いに到達せよと愛が説得する
や否や、

かの人は、聖なる思いに数を与え、雷ユピテルの神のため
世界が歌い、一糸乱れぬ輪舞コロスを舞っていることを

示し、

われらの胸を多様な闇で惑乱させ、

10 事物の力によって、魂に雲をもたらしただからだ。

かくしてわたしは、砂上に描かれた図形の形を

狂おしくも求め、他の重い闇を打ち碎き、

星々の諸原因と明瞭なる軌道を極限まで打ち碎く。

かの人は、それらの座を、雲の合間におぼろげに

しか示してくれないのだ。⁽⁷⁷⁾

以下、この詩の解釈について述べる。

1 第一行「Varro」が示している人物には二つの可能

性がある。第一は、いわゆるウァロ Marcus Teren-

tius Varro つまり、第二は、P. Terentius Varro

Atacinus (前八二)で *Chorographia* 『地理学』

と呼ばれる三部構成の散文詩の著者である。だが、

Chorographia の内容は、透明性と優美さによって特

徴づけられており、ここにはリケンティウスの精神を

ぼやけさせる(第二行)ような困難さは見い出されな

い。⁽⁷⁸⁾したがって、ここに掲げられる「Varro」は、

Marcus Terentius Varro のことであると考えられ

る。

2 第一行「密やかなる」と訳された *arcanus* という語は、「公衆の眼から隠された、秘密の、曖昧な、秘教的な、神秘的な」といった含みをもつ語である。⁽⁸⁷⁾したがって、第一行の「密やかなる道」は、この後に現れる「聖なる思いに数を与え」(第七行)、「世界が歌い」(第八行)、「一糸乱れぬ輪舞を舞って」(第八行)、「星々の諸原因と明瞭なる軌道」(第一三行)などの表現を勘案すると、ウァロがその著書『諸学芸』であろうか)において述べているピュタゴラス派の教説であろうと推察される。⁽⁸⁸⁾

3 第五行「かくも偉大な人の入り組んだ綱要」は、ウァロが自らの教説を説明する際に用いる入り組んだ要約説明であると思われる。⁽⁸⁹⁾

4 第一行「砂上に描かれた図形の形」は、(一)当時の教師がアリストテレスの範疇論を説明したり、全称肯定・全称否定・特称肯定・特称否定の各命題の相互関係を説明したりする際に用いた図形、(二)幾何学の証明を行う際に用いていた図形、(三)天文学者たちが星辰の軌道を説明し論証するために用いた図形⁽⁸⁵⁾

を意味している。リケンティウスは、ウァロが星辰の座をおぼろ気にしか示してくれないため(第一四行)、ここでアウグスティヌスに図形による説明を求めている。

5 リケンティウスがここで言及している学科は、音楽と天文学であると考えられる。「一糸乱れぬ輪舞」(第八行)が含意するのは音楽であり、「星々の諸原因と明瞭なる軌道」(第一三行)が示すのは天文学であると考えられるからである。

リケンティウスは、このようにみずからの窮状をアウグスティヌスに訴えたのち、「すみやかなる援助」(第二九行)を求めた。

- 26 *An te voce vocem, clari quem rector Olympi
Fontibus infantum praefecit et abdita iussit
Vbertate animi longe ructare fluenta?
Ferto, magister, open, ac iutum(?): ne desere
vires*
- 30 *Invalidas necunquq; sacras subverttere glebas*

*Incipe tempus enim, nisi me mortalia fallunt,
Labitur in seniumque trahit.*

26

それともわたしは、声をもってあなたを呼ぶべきまで
あろうか。

清澄なるオリュンポスの導き手は、もの言わぬ幼児
たちの泉にあなたを備えたまい、

隠されたものを、遙かに流れる魂の豊かさによって
吐き出せと命じたもうたのだ。

師よ、すみやかに援助をもたらしたまえ。

30

「わが」弱き力を見捨てることなく、われと共に聖
なる土塊を打ち砕きたまえ。

始めたまえ。もし死すべきものがわたしを欺きつつ

あるのでなければ、

すでに時が滑り行き、老境へと「わたしを」引き行
くからだ。⁽⁸⁸⁾

そして、詩の末尾で、「援助」(第二九行)の内容を具体的に
述べる。

145

*Interea veniet quaecumque futura bonorum
Scripta salutiferi sermonis(et illa priorum
Aequiparanda favis, reputans quae pectore
in alto*

*Conceptum in lucem vomuisti nectareum mel),
Praesentem ipsa mihi te reddent, si mihi
morem*

150

*Gesseris, et libros, quibus intellecta recumbit
Musica, tradideris; nam ferveo totus in illos.*

145

そうこうする内に、様々な善きものをとまなつた、
薬効豊かな言葉の記録が、何であれやって来よう。
そして蜜蜂の巣にも比せられる古のことどもの記録
が……

あなたは思いに沈みつつ、その記録を、深き胸の中
で懐胎された甘い蜜として光の中へと吐き出した
もうた。

その記録は、あなたの現存をわたしにもたらしてく
れる。

150

もしあなたがわたしに行くべきことを示し、

音楽の女神が理解されてそこに

横たわる書物を「わたしに」手渡したもうたなら……
わが身はことごとく、かの書物へと掻き立てられて
いるからだ。⁽⁸⁷⁾

この部分は次のように理解されよう。

6 ここでは、リケンティウスがアウグスティヌスに求めた「援助」(第二九行)が「葉効豊かな言葉の記録」(第一四六行)、「蜜蜂の巣にも比せられる古のことどもの記録」(第一四七行)、「書物」(第一五〇行)と呼ばれている。したがって、リケンティウスがアウグスティヌスに求めた援助は、その著書を自らのもとに送ってほしいということだったことが分かる。

7 その著書とは、第一五〇行に現れる「音楽の女神」という語からして、アウグスティヌスがカシキアクトムで書き始めていた『音楽について』*De musica*であろうと考えられる。あるいは、第一一行で天文学のことと言及されていることから、天文学に関連した幾何学の著作⁽⁸⁸⁾なども含まれるのかもしれない。

8

第一四六〜七行「蜜蜂の巣にも比せられる古のことども」とは、カシキアクトムでの生活と、そこで学んだ自由学芸を中心とする一様なことがらを示すと考えられる。これらは、リケンティウスにとって、蜂蜜を蓄えた「蜜蜂の巣」のように甘美な思い出であった。

9 リケンティウスがウァロの著作の理解のために送ってほしいと嘆願した書物は「蜜蜂の巣にも比せられる古のことどもの記録」、すなわち「カシキアクトムで学んだことがらの記録」と述べられている。したがって、カシキアクトムでは何らかの形でウァロの自由学芸が学ばれていたことになる。自由学芸諸学の多岐にわたる内容を書物なしに学ぶことが困難であることを考え併せれば、ウァロ『諸学芸』*Disciplinae*がカシキアクトムに持ち込まれた可能性も高いと考えられる。⁽⁸⁹⁾

これらの事項を統合すると、この詩が執筆された事情はおよそ次のようなものであったことが分かる。

リケンティウスは、アウグスティヌスが三八七年の春、洗礼を受けてその秋アフリカに帰国した後もミラノに留まり、この詩が書かれた三九五年に至るまで八年間にわたっ

て詩作の学びとともに自由学芸の学びを続けていた。その学びは、カシキアクムで学び始めたウァロの著作（おそらくは『諸学芸』*Disciplinae*）を基盤とするもので（第一行）、そこでは、数学（第七行）と結合した音楽（韻律ないし旋律）理論（第八行）、幾何学（第二一行）、天文学（第二三行）、ピュタゴラス派の教説（第一行）、そしておそらくは論理学などが、時にはウァロ特有の難解な要約的説明によって（第五行）展開されていた。

だが彼は、ウァロの難解な教説を十分理解できなかった。ウァロは自らの深遠な教説を「雲の合間におぼろげにしか示してくれない」（第一四行）と感じ、書物への情熱は失せていった（第三行）。そこで彼は、八年前のカシキアクムでの半年足らずの甘美な生活（第一四六行以下）を想い出す。アウグスティヌスが、カシキアクムで行ったように⁽⁹⁰⁾「難解な天文学の理論を再び図形を用いて明瞭に説明してくれることを」「狂おしくも求め」（第一二行）るようになる。こうしてリケンティウスは、アウグスティヌスが、カシキアクムで書き始めていた自由学芸の著作、とりわけ『音楽について』を（第一五〇行）完成し、みずからのものと送ってくれるようにと援助（第二九行）を求めた。⁽⁹²⁾

カシキアクムでの生活は、リケンティウスにとって、いわば自由学芸の原点であった。そしてアウグスティヌスがそこで書き始めた自由学芸の書物は、その原点を思い起こさせる甘美な「蜜蜂の巣にも比せられる古のことどもの記録」（第一四六〜七行）であったのみならず、現在でもなお有効な「葉効豊かな言葉の記録」（第一四六行）であった。かくしてリケンティウスは、この技巧を凝らした詩をミラノからアフリカのアウグスティヌスに送ることによって、自らの詩作の進歩を示し、同時に、アウグスティヌスの自由学芸の著作を入手することによって、カシキアクムという原点に立ち返り、そこから自らの自由学芸の学びをやり直そうと考えたのである。

だが、リケンティウスのこのもくろみは受け入れられなかった。アウグスティヌスは、リケンティウスが性的な問題に関わりその精神が神的事物から離れていたからである⁽⁹³⁾うか、この詩を気に入らず、『音楽について』を彼のもとに送らなかつた。⁽⁹⁴⁾こうして二人は、これ以降、別の道を歩いて行くことになる。すなわち、アウグスティヌスが教会の中に入って行ったのに対し、リケンティウスは、カシキアクムで新たな時代の「哲学」（＝キリスト教）の薫陶を

受けてキリスト教徒となりながらも、古の文化との間で揺れ動き、異教徒の元老院議員の支援を受けつつ、後には元老院階級にまで出世してゆくことになるのである。⁽⁹⁷⁾

5 『音楽について』

以上の考察によって、カシキアコムで探求されていた自由学芸の具体的カリキュラムがいかなるものであるか、その具体像が明らかになった。そこでわれわれは最後に、『音楽について』*De musica* に眼を向けることにしたい。

この書物は、カシキアコムで書き始められた自由学芸の書物の中で唯一現存するまとまった著作であり、したがってわれわれは、この著作の中に、当時のアウグステイヌスが考えていた自由学芸諸学科のひとつの具体的実例をみるこゝとができるからである。

以下われわれは、当時の彼が考えていた「物的なもの」を媒介として、いわば確実に一步一步昇って行きながら、非物的なものにまで到達する(『訂正録』一・六)ということがいかなることであるのかを念頭に置きつつ、この著作を概観することにする。

5・1 『音楽について』の執筆事情およびその意図

『音楽について』の執筆事情については、『訂正録』一・六に次のように述べられている。

わたしは、受洗準備のためにミラノにいたとき、諸学芸の書物を書くようしていました。わたしは、当時生活と共にし、このような学びを毛嫌いしてはいなかった人々との議論によって、物的なものを媒介として、いわば確実に一步一步昇って行きながら、非物的なものにまで到達し、彼らをそこにまで導いて行こうとしていたのです。……また『音楽について』六巻ですが、この書物は「リズム」と呼ばれる部分まで書きました。しかしこの六巻の書物は、わたしが洗礼を受けて、イタリアからアフリカに戻って書いたものです。それはただミラノで書き始めたにしか過ぎません。

この記述によると、『音楽について』はアウグステイヌスがカシキアコム滞在中(三八七年)に書きはじめられた

ものの、そこでは完成されず、彼がアフリカ(タガステ)に戻った後、三九〇年あるいは三九一年頃に完成されたと考えられる。彼のアフリカ帰還(二三八八年)以前の著作には、カシキアコム対話篇のほか、『独白録』Soliloquia、『魂の不死について』De immortalitate animae、『魂の大きさについて』De quantitate animae、『自由意志論』De libero arbitrio 第一卷、『カトリック教会の道徳とマニ教徒の道徳について』De moribus ecclesiae catholicae et manichaeorum があり、アフリカ帰還直後には『創世記について—マニ教徒を論駁する』De Genesi contra Manichaeos が執筆されているので、『音楽について』はこれらの著作と並行して執筆され、『教師』De magistro、『真の宗教について』De vera religione の前に完成されたと考えられる。

『訂正録』一・一一・一では、この記述を承けて、『音楽について』について次のように述べられている。

それから私は、先に述べられたように、『音楽について』六巻を書きましたが、これらのうち第六巻がもっ

とも知られるようになりました。というのも、そこにおいてこそ認識されるにふさわしい事項が、すなわち「いかにして物体的かつ霊的でありながらも可変的な数から出発して不変の数に到達するか」という事項が論じられているからです。この不変の数は、ほかならぬ不変の真理それ自体の内に存在し、だからこそ、「神の眼に見えない性質は、造られたものを通して知性認識されたものとして認められる」(ローマー・二〇)と語られています。これができないにもかかわらず「キリストへの信仰によって生きる」(ローマー・一七)人々は、この世の生ののち、かの眼に見えない性質を一層確実に、幸福な仕方で見るとに至ります。ですが、これができる人々も、「神と人間との間の唯一の中保者」(テモテ一、二・五)たるキリストへの信仰がないならば、己の一切の知恵もろとも 滅びるのです。⁽⁹⁸⁾

この記述においてわれわれはまず、

物体的かつ霊的でありながらも可変的な数から出発し

て不変の数に到達する

という一節に注目したい。この表現は、『訂正録』一・六で語られていた

物体的なものを媒介として、いわば確実に一步一步昇って行きながら、非物体的なものにまで到達し、

という表現の、音楽における特化表現と考えられるからである。すなわち、自由学芸一般の規定において形容詞の中性形の名詞化(*corporalia* — *incorporalia*)という一般的な形で述べられていた事項が、ここでは「数」(*numerus*)という限定した形で述べられているのである。

<i>artes liberales</i>	<i>corporalia</i>	<i>incorporalia</i>
<i>musica</i>	<i>corporales et spirituales sed mutabiles numeri</i>	<i>immutabiles numeri</i>

われわれは、この記述から、『音楽について』なる著作が明らかにカシキアムで企図された自由学芸と同じ意図の

もとに執筆されたことを知る事ができるであろう。

5・2 『音楽について』の内容

だが、かかる予備理解をもちつつ『音楽について』のテキストに赴くと、われわれは大いなる困惑に直面する。現存する『音楽について』は六巻からなる著作であるが、そのかなりの部分が、「非物体的なもの」ないし「不変の数」とはおおよそ関係のない、おそらくは当時の世俗的自由学芸において教えられ論じられていたであろう事項を詳細に扱うものとなっているからである。

この事態は、以下に示される『音楽について』の梗概を一見すれば一目瞭然である⁹⁹。

1 第一巻…総論

- (a) 序論—音楽 *musica* の定義、その説明 (一・一—一・一・六・一二)
- (b) 運動におけるハルモニアの規則の源泉としての数 (一・七・一三—一・一三・二八)

2 —第二巻…脚 *pes* について

- (a) 脚の性格と数 (二・一・一〜二・八・一五)
 (b) 脚結合の規則 (二・一九・一六〜二・一四・二六)
- 3 第三卷…リュトムス・韻律・詩句
 (a) リュトムス・韻律・詩句 (三・一・一〜三・二・四)
 (b) リュトムス *rhythmus* について (三・三・五〜三・六・一四)
- (c) 韻律 *metrum* について (三・七・一五〜三・九・二二)
- 4 第四卷…韻律について(続) — その種類
- 5 第五卷…詩句 *versus* について
 (a) 詩句 *versus* とは何か (五・一・一〜五・四・六)
 (b) いかにして六脚韻は古人の典拠と根拠において分割されるか (五・四・六〜五・六・一二)
 (c) いかにして詩句の分岐における不等性は等しさに還元されるか (五・七・一三以下)
- 6 第六卷…ハルモニアの根源・永遠の数の場としての神
- (a) 序 (六・一・一)
 (b) 魂のハルモニアとその段階 (六・二・二〜六・八・二二)

(c) 永遠のハルモニアとその源泉としての神 (六・九・二三〜六・一七・五九)
 i 永遠のハルモニア (六・九・二三〜六・一一・三三)
 ii 永遠のハルモニアの源泉としての神 (六・一一・三四〜六・一七・五九)

この梗概を見ると、『音楽について』全六卷のうちの第一〜第五卷までが、脚 *pes*、リュトムス *rhythmus*、韻律 *metrum*、詩句 *versus* といった狭義の韻律論に充てられていることが分かる。そして、『訂正録』一・六および一・一一・一において本書の意図とされている「物体的かつ霊的でありながらも可変的な数から出発して不変の数に到達する」という手続きは、第一〜五卷の長大な専門的議論が終わったあとの第六卷においてわずかに論じられるにすぎないのである。

5・3 「物体的なものを媒介として非物体的なものに
まで到る」の意味

だが、かかる事態は、リケンティウスの詩の分析によつてカシキアクトムにおける自由学芸の姿を明らかにしたわれわれにとつては、格別驚くべきことではないであろう。カシキアクトムにおいては、ウァロの著作を基盤として、数学と結合した音楽理論や幾何学、天文学、ピュタゴラス派の教説、そして論理学などが学ばれていたが、その内容は、後のリケンティウスが独力での理解に困難を感じる程に、高度に専門的なものであったからである。

かくしてわれわれは、

1 アウグスティヌスは、『音楽について』なる著作を「物体的かつ霊的でありながらも可変的な数から出発して不変の数に到達する」ために執筆したと述べている。

2 『音楽について』全六巻の内第一―五巻までが韻律論の専門的議論にあてられている。

というふたつの事実を統合して、次のように結論することができる。

カシキアクトム期のアウグスティヌスにとつて「物体的なものを媒介として非物体的なものにまで至る」ということは「非物体的なものの発見のために、まず物的なものに専心する」ということを意味していた。

この結論は、『書簡』一〇一に残されている『音楽について』の執筆に関連した次の言葉によって一層明らかとなる。

1 アウグスティヌスは、世事を離れてカシキアクトムに赴いた当初、『音楽について』第一―六巻で論じられた韻律論とは別に、「旋律論」六巻を執筆してこれを韻律論に接合しようとの意図をもっており、この旋律論の執筆を「楽しみ」*deliciae* にしていた。

2 だが「彼に対して教会の心配の重荷が課せられたのは、それらの楽しみはことごとく手から逃げてゆき」、その結果彼は、写本の紛失のゆえに、『音楽につ

いて』を最後まで完成することも、既存の諸巻の全体を校訂することもできなくなった。

3 そこで彼は、第一〜五巻の結論たる第六巻のみを自ら校訂した。

カシキアコム時代のアウグスティヌスは、同行者たちを「物体的なものを媒介として非物体的なものにまで導こう」としていた。この意図は、明らかに彼の回心に由来すると考えてよいであろう。だが、当時の彼は、その一方で、自由学芸の中に深く沈潜しており、自由学芸の専門的事項について論じ、それについての著作を執筆することに「楽しみ」*delectare* を感ずる人間でもあったのである。

先に引用された『訂正録』一・一一・一の言葉、『音楽について』全六巻のうち

第六巻がもっとも知られるようになった

という言葉は、この脈絡から理解されなければならない。アウグスティヌスはその理由を、

そこにおいてこそ認識されるにふさわしい事項が、すなわち「いかにして物体的かつ霊的でありながらも可変的な数から出発して不変の数に到達するか」という事項が論じられているからです。

という点に求めている。世俗的学問よりも非物体的事項に関心をもつキリスト教会の人々にとって、『音楽について』第一〜五巻よりも第六巻の方に関心をもつことは容易に推察できることである。しかし、当時のアウグスティヌスは、教会の人々に関心をもつ『音楽について』第六巻のみを執筆する人間ではなかった。彼はまた、いわゆる教会人が関心を抱くとはいえない『音楽について』第一〜五巻の長大かつ専門的な議論を「楽しみ」として執筆する人間でもあったのである。

5・4 『告白』九・四・七の言葉

この『音楽について』第一〜五巻の存在という事実を考えると、われわれはアウグスティヌスが『告白』九・四・七でカシキアコムでの自由学芸の著作に関連して語った言

葉、

彼(アリピウス)ははじめのころ、キリストの名が私たちの著作のうちにはさまれることに反対していました。というのは彼は、私たちの著作の中に、主がすでに打ち碎きたもうた蛇の毒を防御する教会の葉草の香りよりはむしろ、学校の香柏の香りのただようことを望んでいたからです。⁽¹⁰²⁾

を字義通りに受け取ることはできない。『音楽について』
第一〜五巻の長大な専門的議論が、

アウグスティヌスの主体的意図に反して、ただアリピウスの要請のみによって

執筆された、などということは到底考えられないことだからである。確かにアリピウスは、カシキアコムで執筆された自由学芸の著作の内に学校の香柏の香りのただようことを望んでいたであろう。だがアウグスティヌスもまた、たとえアリピウス程ではないにしても、これを望んでいた―

このように考える方が、『音楽について』第一〜五巻の存在の事実の説明としてはよほど自然であろう。Fischerは、カシキアコムでの自由学芸の著作の形式について、

アウグスティヌスが意図していたのは、なによりも学校の学びに従事している若者たちを教えるということであった。そこで彼は、「諸学芸の著作の」執筆形式をもこの意図に適合したものとなし、みずからの諸学芸の著作が学校で使用されるために相応しいものとしてしようとした。⁽¹⁰³⁾

と述べているが、この語の方がカシキアコムでの自由学芸の実態を正確に表現していると考えられるのである。

6 まとめ ― カシキアコムでの自由学芸

以上われわれは、カシキアコムでの生活の姿を主にカシキアコム対話篇から描き出し、そこで学ばれていた自由学芸がいかなるものであったのかを『秩序』第二巻とリケネットウスの詩、『音楽について』から明らかにした。

われわれは最後に、これらの資料から明らかになったことがらをまとめてみることにする。

1 アウグステイヌスは、回心以前から、「世の煩いを離れて親しい仲間と学問や哲学に専念する」という「自由な閑暇」*otium liberum* の生活を望んでいた。キケロの『ホルテンシウス』によって「知恵への愛」(＝哲学)に開眼したアウグステイヌスにとって、このような生活はひとつの理想であっただろう。

2 彼は、三八六年一〇月の回心の後、家族(母モニカ、息子アデオダトゥス、従兄弟ラステイディアヌスとルスティクス)、親しい友人(アリピウス)、ふたりの弟子(リケンティウス、トリゲティウス)を伴い、ミラノ近郊カシキアカム *Cassiacum* のウエレクンドゥスの山荘に滞在し、かねてより念願の「自由な閑暇」の生活に入った。この生活は、彼が洗礼を受けるまでの半年近く(三八六年一月上旬～三八七年四月下旬)にわたって続くことになる。この決意には、彼の胸の病も関わっている。

3 半年近くにおよんだカシキアカムでの生活では、

その冒頭に「カシキアカム対話篇」に記された対話が行われたのかもしれない(「対話篇」が実際の討論を反映しているとすればの話であるが)。しかし、残されたほとんどの期間においては、これとは別のことが行われていた。その期間には、自由学芸を媒介とした真理探求が行われていたと考えられる。

4 カシキアカムでの自由学芸の学習は、何らかの形でウァロの自由学芸と関わっていた。彼の『諸学芸』*Disciplinae* が座右に置かれていた可能性も十分ある。

5 カシキアカムでの自由学芸を基盤とした真理探求の具体的な学習内容は、およそ次のようなものだったと考えられる。

- (a) ウェルギリウスの詩の講読・朗読
 - (b) それに関連した韻律論、音楽論(韻律論の基盤として、文法学の知識も当然要求されていたであろう。)
 - (c) 図形を用いた論理学(問答法)、幾何学、天文学などの研究
 - (d) 哲学(たとえばピュタゴラス派の教説)の研究
- 6 カシキアカムでの真理探求は、参集者相互の議論によって行われた。だがそこでの議論は、アウグステイ

ヌスの肺の病によってしばしば中断された。また討論が行われず、アウグステイヌスが一日の大部分を手紙を書くことに費やした日もあった。このようなとき、自由学芸の学習は、各自の独習に委ねられたと考えられる。

7 アウグステイヌスは、これらの自由学芸を基盤とする真理探求によって、カシキアコムで生活を共にしていた人々を「物的なものを媒介として、一步一步昇って行きながら、非物的なもの(＝神と魂の認識)にまで導く」ことを意図していた。

8 この自由学芸を媒介として真理探求の階梯は、(一) 三学 trivium (文法学、問答法、修辞学)、(二) 四科 quadrivium (音楽、幾何学、天文学)、(三) 哲学 philosophia の枠組で捉えられている。

9 だが、カシキアコムで用いられたであろうウァロの自由学芸の書物(『諸学芸』Disciplinae)はアウグステイヌスの目的には合致しなかった。それらは

- (a) 実学(建築学、薬学)を含んでいる
- (b) 占星術を含んでいる
- (c) 哲学を含んでいない

という点で不十分なものだったからである。

10 そこでアウグステイヌスは、学習者を「物的なものを媒介として非物的なものにまで導いて行く」ために、独自の自由学芸の書物を執筆し始めた。

11 彼の「物的なものを媒介として非物的なものにまで導いて行く」という意図は、「非物的なもの発見のために、まず物的なものに専心する」ということを意味している。したがって、ここで執筆された自由学芸の著作の中にキリスト教の色彩が直接的な形で表明されているとは必ずしも言えないことになる。

アウグステイヌスがカシキアコムで行った自由学芸を媒介とする真理探求は、およそ以上のようなものだったと考えられる。要約すれば、カシキアコムでの自由学芸は、

世俗的学問を媒介として神へ

という、ユスティノスやオリゲネスの伝統に連なる神認識への道程を示すものであったのである。回心直後のアウグステイヌスは、東方教会の伝統に近い所に立っていたのか

もしれない。

註

- (1) 新発見の書簡・説教についての概要は、P. Brown, *Augustine the Bishop in the Light of New Documents, Patristica, Supplementary Volume 1, 2001, Sinsseisha, Nagoya Japan, pp.131ff.* を参照のこと。
- (2) 書簡冒頭でコンセンティウスは、自らが『告白』を読んだときの嫌悪感を生身のアウグスティヌスに対して率直に語っている。彼は、一二年前に『告白』の写本を購入した際、冒頭の二〜三頁を読んだだけで、写本を長年にわたり「封印されたかのように」放置していたが、突然学びの意欲に駆られて『告白』を読み始める。だが彼がそこに見いだしたのは「厭わしい輝き」以外のものではなかった。彼は極度の嫌悪感に駆られて、『告白』のみならずすべての購入した著作を「毒蛇の血よりもなお注意深く」避けるようになる。その嫌悪感、彼が愛好して来たラクタンティスをも聖書をも読む気にさせなくする程に激しいものであった。【補遺】『書簡一〜二』を参照。
- (3) 四二八年という年は、『キリスト教の教え』第三巻後半部(225.36以下)と第四巻(キリスト教的雄弁家論)が執筆されて同書が完成された翌年であることに注意されたい。
- (4) この語はなれば熟語となっていたようである。『告白』はこの語の熟語化を窺わせる表現がある。 *Conf. 9.3.6. prae amore libertatis otiosae: De ord. 1.2.4. et quem fructum de liberali otio carpanus. ...*
- (5) P. Brown, *Augustine of Hippo*, University of California Press, 1967, p.115.
- (6) C. Evangelidou, *Aristotle's Categories and Porphyry*, Leiden, Brill, 1988, p.4.
- (7) Porphyrios, *Vita Plotini*, 12
- (8) H.-I. Marron, 'Un lieu dit "Cité de Dieu"', *Aug. Mag.* 1, 1954, *Études Augustiniennes*, pp.101-110.
- (9) *Conf. 8.6.15.*
- (10) *Conf. 6.12.21. securio otio simul in amore sapientiae uiuere ...*
- (11) *Conf. 6.14.24.* 「私たちいくたりかの仲間は、人生のわずらわしさを語りあひ、それをいとって、一つの計画を心にいだき、ほとんど決定しかかっていました。すなわち、群衆を離れて閑暇の内に生き、その閑暇を次のように暮す。……」
- (12) *Conf. 8.12.30.*
- (13) *Conf. 9.2.2. 9.2.4. Contra Acad. 1.1.3.*
- (14) *Conf. 8.3.13.*
- (15) *De ord. 1.2.5.*
- (16) *Conf. 8.6.13.*
- (17) 当時の文法学 *grammatica* は、(1) 読み書き *litteratio*

- と呼ばれる部分と、(二)文学 *litteratura* と呼ばれる部分とに分けられていた (p.37 参照)。前者を担当するのは「文字を教える者」*librarius* なら、「学校教師」*Iudimagister* であつたが、後者は「文献学」*philologia* と呼ばれるべきものであり (B.Fischer, *De Augustini disciplinarum libro qui est De dialectica*, *Lena*, 1912, p.15)、『そこでは、詩人・歴史家の著作に加えて弁論家の著作が取り上げられていた。
- Varro *fr*107. (G.S.): *ars grammatica quae a nobis litteratura dicitur scientia est quae a poetis historicis oratoribus dicuntur ex parte maiore. eius praecipua officia sunt quattuor ...: scribere legere intellegere probare.*
- われわれが「文学」と呼ぶ文法学は、詩人、歴史家、弁論家のほとんどが語る知識である。その固有の職務は四つである。……書くこと、読むこと、理解すること、論証することである。
- (18) *Conf. 9.3.5.*
 (19) *Conf. 9.3.5.*
 (20) *De ord. 1.9.29.*
 (21) *De ord. 1.8.22.*
 (22) *De ord. 2.1.1.*
 (23) *Contra Acad. 2.4.10.*
 (24) *De ord. 2.1.2; Contra Acad. 2.1.1.25.*
- (25) *Contra Acad. 2.1.1.25.*
 (26) *De ord. 1.8.25.*
 (27) *De ord. 1.8.24.*
 (28) *De ord. 1.3.6.*
 (29) *De ord. 1.8.25.*
 (30) *De ord. 1.8.26.*
 (31) *Contra Acad. 2.4.10.*
 (32) *Conf. 9.2.4.*
 (33) *De ord. 1.11.33.*
 (34) *Contra Acad. 2.1.1.25.*
 (35) 清水正昭は『アウグスティヌス著作集』第一巻、教文館 p.502 以下 *Contra Acad. De beat. vit. De ord. の討論を* 一二月一〇日(=11月13日)に於て D. Ohlmann, *De sancti Augustini dialogis in Cassiciaco scriptis*(diss. Strasbourg), 1897, 13seq. の説を紹介している。
- (36) 岡部由紀子『アウグスティヌスの懷疑論批判』創文社 p. 3f.
 (37) *Retr. 1.6.*
 (38) ただし、カシキアクム対話篇が、そこで行われた実際の議論をどの程度反映しているのかについては、研究者たちの間で意見の相違がある。岡部 p.4
 (39) *Aug. 4 Conf. 4.16.30* において、みずから学んだ自由学芸の学科名を次のように掲げている——「弁論の学」*ars loquendi* (=rhetorica)、『議論の学』*ars disserendi* (=dialec-

tica) '「図形の測量」 de dimensionibus figurarum (= geometria) '「音楽に(づ)つ」 de musica '「数に(づ)つ」 de numeris。自由学芸の著作の執筆に際して、これらの知識が生かされてゐることは言うまでもない。

(40) *Rehr. 1.3.1.*

(41) Fischer p.12.

(42) 現在失われてゐる Varro の *Disciplinae* は極めて大きな影響を与えた。Fischer は「ウァロの後に名声を得た文法学者たちは、これらの著作を、講解するにもその内容においても根底的に卓越したものとみなし、これらを引用し、筆写し、展開したのみならず、これらを変形し、それが彼の著作である、ウァロの著作であると言われえない程にまでこれらを秘匿した」(*ob. cit. p.3*)と述べている。アウグスティヌスも『秩序』二・二二・三五、二・二二・五四で Varro に言及し、二・二二・五四では Varro を賞讃してゐる。また『秩序』第二巻の自由学芸の記述には、後述 (pp.40-44) のように、Varro の影響が随所に見い出される。cf. Fischer, S.14-18.

(43) Varro は、ギリシア人 (Platon, Isokrates, Poseidonios) が学んでゐた諸学にローマ人 (Cato, *praecipua ad M.Filium*) のそれを付加し、さらに薬学と建築学を加へて *Disciplinae* を書じた。 *Neue Pauly*, Bd.12/1, S.1139, art. 'Varro'; *Kleine Pauly*, Bd.5, S.1138.

(44) 次節で扱うリケンティウスの詩からすると、ウァロの *Dis-*

ciplinae はカシキアタムで座右に置かれて読まれていたのかも知れない。

(45) 同時代の Cornelius Cersus の『諸学芸の大いなる環』 *Ampius disciplinarum orbis* には、哲学に関する六巻の書が含まれてゐた (Fischer, p.10, n.4)。また Aug. が Cersus を知つてゐたことについては、cf. *Schl. 1.21*.

(46) Hieron. *Epist.* 53 (PL vol. 22 p.544) *Taceo de grammaticis, rhetoricis, philosophis, geometricis, dialecticis, musicis, astronomis, astrologis, medicis. ... cf. Fischer, p.10.*

(47) *De ord. 1.8.24*, 「いづれ、一切をあけて、純粹かつ誠実なる愛の称讃へと高揚するがよい。学問を賦与され徳によって形作られた魂は、この愛によって哲学を介して結合されるのである」。

(48) *De ord. 2.12.35.*

(49) *De ord. 2.12.36*, ところで掲げられてゐる文法学の課題が、当時のラテン文法学の内容に正確に対応することに注意されたい。

(50) *loc. cit.*

(51) *A. Wilmanns, De M. Terentii Varronis libris grammaticis particula*, Bonn, 1863, p.101.

(52) *De ord. 2.13.38.*

(53) H.-Marron, *Saint Augustin et la Fin de la Culture Antique*, (1958), Éditions de Boccard, 1983, Paris, p.240.

に由来するところを示した。cf. Fischer, p.19.

- (66) Gellius, *Noctes Atticae*, 16.18, Pars quaedam geometriae *ὀρθοκλή* appellatur, quae ad oculos pertinet, pars altera, quae ad auris, *καυοκλή* vocatur, qua musici ut fundamento artis suae utuntur Est et alia species *καυοκλήs*, quae appellatur *μετροκλή*, "Sed haec," inquit M.Varro, "aut omnino non discimus aut"
(67) *De ord.* 1.3.7.
(68) *Contra Acad.* 2.4.10.
(69) *De ord.* 1.8.24.
(70) リンネンテハニスダ' 自身の註の17行にトロツのこゝを註へしところ。
sed nos, praeterea quod ab una exsurgimus urbe, quod domus una tulit, quod sanguine tingimur uno saeculorum, christiana fides conexuit; ...
(71) Fischer, p.55.
(72) ナニスダ' 第十七行にダ' "quis" が "quibus" の古形として用いられたところ。
(73) A.K. Clarke, 'Licentius, Carmen ad Augustinus, II 45 seqq., and the Easter Virgil', *Studia Patristica*, viii, pp. 171-175.
(74) A.K. Clarke, *op. cit.* p.174. cf. P.Brown, *op. cit.* p.119.
(75) Fischer, p.54 は' リンネンテハニスダ' 「この詩によってカシキヤタムの『諸字考』研究にさうして自身の教師に対して決算報告をした」と述べている。
(76) 以下' 註の本文は' CSEL Vol.34, S. Augustini Epistulae I ed. Goldbacher, pp.89-95 を用いる。なほ' 本文の解釈に際して' Saint Augustine, Letters, Vol.I, *Fathers of the Church*, Vol.12 を参照した。
(77) 'quis' や 'quibus' の古形を註へ。cf. Saint Augustine, Letters, Vol.I, *Fathers of the Church*, Vol.12, p77.
(78) Fischer, p.56.
(79) *Oxford Latin Dictionary* の art. "arcanus" を参照。
(80) *De ord.* 2.20.53f. でオクタコリス派の説が「ほとんどの神のいふ言ひを誤り」をとりあげられてゐる。
(81) Fischer, pp.56f.
(82) *Conf.* 4.16.28.
(83) Apleius, *Περὶ ἐπιμνησίας*, 5.
(84) e.g. Platon, *Memor.*
(85) Marrou, *op. cit.* p.196.
(86) この部分' 'ac iutum' と註む写本もあるが' Goldbacher に従つて' 'actutum' と註へ。
(87) 'illa priorum' や W.Parsons に従つて' このキヤゴ註本。cf. Saint Augustine, Letters, Vol.I, *Fathers of the Church*, Vol.12, p83.
(88) *Refr.* 1.6 によれば' アウグスティヌスは天文学の著作を執筆してはゐない。
(89) アウグスティヌスは' *De ord.* 2.12.35 で' ウァロに基つて

く文法学の二区分である littertio と littertura のギリシア語を思い出せないと語っている (p.40)。このことは、カシキアコムにウァロの著作が持ち込まれなかったことを必ずしも意味しない。アウグスティヌスが記憶に頼ってこの箇所を執筆した可能性もあるからである。

(90) リケンティウスが「砂上に描かれた図形の形を、狂おしく求める」(V.IIf.) のは、カシキアコムでの経験に基づいているのであろう。

(91) Aug. はみずから自由学芸諸字の内容を容易に理解したことを *Conf.* 4.16.30 で表明している。したがって、彼のカシキアコムでの自由学芸の講義や議論は明瞭なものであったと考えられる。

(92) 彼が特に『音楽について』を求めた背景には、彼の詩作の営みに関係しているのかもしれない。

(93) 第七五行に次のような語がある。et totus semel in tua corda venirem, si mens coniungio incumbens retineret euntem. 「わたしは全身全霊をもってあなた (アウグスティヌス) の心に入りたい。もし精神が闇の絆によって萎え、行へつことを阻まらされるのでなければ……」

(94) Fischer, p.60. リケンティウスの詩の一三七行以下に次の句がある。

sed nos, praetera quod ab una exurgimus urbe,
quod domus una tulit, quod sanguine tinguimur
uno

saeculorum, christiana fides conexit; ...

(96) P. Brown, *op. cit.* p.119.

(97) 『アウグスティヌス著作集』 I, p.492.

(98) *Retr.* 1.11.1. Deinde, ut supra commemoravi, sex libros de musica scripsi, quorum sextum maxime innotuit, quoniam res in eo digna cognitione versatur, quomodo a corporalibus et spiritualibus, sed mutabilibus numeris, perveniatur ad immutabiles numeros, qui iam sunt in ipsa immutabili veritate, et sic «invisibilia Dei, per ea quae facta sunt intellecta conspiciantur». Quod qui non possunt et tamen «ex fide Christi vivunt», ad illa certius atque felicius conspicienda post hanc vitam veniunt. Qui autem possunt, si desit eis fides Christi qui «unus mediator est Dei et hominum», cum tota sapientia sua pereunt.

(99) ビトの梗概は *Oeuvres de Saint Augustin*, VII. *dialogues philosophiques*, IV. *La Musique*, Desclée de Brouwer et cie, 1947, pp.545f. に拠った。

(100) *Epist.* 101.3. ... initio nostri orti, cum a curis maioribus magisque necessariis uacabat animus, volui per ista, quae a nobis desiderasti, scripta proludere, quando conscripsi de solo rhythmo sex libros et de melo scribere alios forsitan sex, fateor, disponebam, cum mihi otium futurum sperabam, sed postea quam mihi cura-

situm dicenti genus solus placebat; quem tamen ardentis-
simo amore desiderae semel lectum cum ceteris abieceram,
cumque inaestimabili fastidio lectionis aslus animae meae
quasi morbo lethargico permeretur, uix per tot annos scrip-
turas canonicas semel aut iterum desidiosissime transcurri.
Et tamen cum me penitus totum et mente et corpore
soccordia possideret, si qua ut adsolet diuinarum rerum
quaestio inter Christi famulos me coram fuisset exorta,
eram unus ex illis quos apostolicus sermo depinxit uolens
esse legis doctor et non intelligens neque quae dicerem
neque de quibus affirmarem. Quidquid autem mihi iustus
uidebatur inanibus uerbis defendere laborabam.

聖なる主によって、また私によってとこしえに讃えられ崇められ
る師父アウグスティヌスに宛てられたコンセンティウスよりの覚
え書き

一、およそ二年前、わたしは『告白』および他の可能な限り
多くの著作を、一教えに対する善良にして称賛すべき熱心さに駆
られてではなく、著作を所有したいとの咎められるべき欲求に駆
られて一購入いたしました。これらの著作を、わたしは今日ま
で一信じがたい無頓着にかまけて一封印されたかのように所持
して来たのですが、ごく最近になってこれらを読むとうと企て、自

ら熱い思いで探求していたことがらがそこにこの上なく完全な形
で語られているのを見いだしました。そしてわたしは、自らの考
えの多くを形として一いわば絵画が示してくれるように一認識
し、そのことによって、自ら知ろうと望む他のことがらをも学び
つつ、「自分に教師が欠けているのではなく、自分が教師にふさ
わしくないのだ」と思い始めました。要するにわたしは、主のみ
顔の前で率直に告白するのですが、およそこの四年間以前には、
みずからあなたの聖さの眼差しを求めようと考えるようになる
までは、『告白』第一巻のせいぜい二―三頁を読んただけだっ
たのです。

ですがわたしは、あなたの師父の本性がおよそむなしの人々の
精神を涙に満ちた眼で整えるのに慣れていらっしやるのとちよう
ど同じように、あなたの文章の厭わしい輝きに撃ちのめされ、み
ずからにとって心地よいおのれの未熟さの闇へと直ちに走り戻り
ました。あなたの著作には、みずからの視力の傷を介護してくれ
るいかなる柔らかなものをも優しいものも見いだすことがなかつ
たからです。こうしてわたしは、『告白』のみならず他の著作を
も「毒蛇の血よりもなお注意深く」(ホラティウス『歌』一・八・
九―一〇)避けるようになったのです。

二、わたしはかくもひどく死すべき嫌悪感に捉われていたので、
わたしの病んだ胃は、正典―それはその名声によってわたしに
とって崇めるべきものとなっていました―を除いて、いかなる
正典解釈者の布告にも吐気をもよおすまでになっていました。た
だひとりラクタンティウスのみが、その明快で秩序だった語り口

でわたしを喜ばせていたのですが、そのラクタンティウスも、不精への猛烈な愛着のゆえに、一度読んだだけで他の著作と共に投げ捨ててしまいました。そして、わが魂の健康は、読書への測りがたいほどの嫌悪感のゆえに、いわば惰眠をむさぼる病いに取り憑かれていましたので、わたしはかくも何年もの間、正典を一度なりとも非常なる熱意に満たされて読み通すこともなかったのです。

けれども、わたしが身も心もことごとく投げやりな思いに捉えられていたとしても、もしその時に、聖なることがらについての疑問が、キリストの僕の間にも起こるようになり、わたしの前で始まったとするなら、その時わたしは、使徒の言葉が描く人々のひとりとなっていたでしょう。律法教師になろうとしながらも、自ら語ろうとすることや自ら認めていることを理解しない、そのような者になっていたでしょう。そしてその一方で、みずからにとって一層正しいと思われたことのすべてを、むなししい言葉で守ろうと労していたでしょう。

《討論》

監修 水落健治

記録作成 又野聡子

加藤 信朗

私は、アウグスティヌスの回心千六百年記念のローマの学会に参加した際、是非カシキアクムという場所に行ってみたいと思った。実在のカシキアクムに関しては、ミラノ郊外に二箇所「ここである」という説があるが、私はそのうちの一箇所（とても美しい起伏に富んだ丘陵）を訪ねた。正確な場所の真偽はともかく、カシキアクムとはこのように、今日は暖かいから皆で草原で詩を読もうとか、雨の日には屋内の浴場で話をしたり、というような場所であった、と実感されたものである。

本日はそのように、たいへんに学識豊かなご発表であった。ところが（と敢えて申し上げるが）、私はこのたび

『アウグスティヌス『告白録』講義』という書物を出版し、そこには私独自の『告白録』の読み方をすべて書いてしまった、と言ってもよい。水落先生が、『告白録』論争としては主として通常第七巻の問題であるとされたことは私も取り上げたが、私にはむしろ『告白録』第九巻が、カシキアクムについて具体的に述べていると考えられるのである。その箇所に関しては水落先生も触れられたが、私にとってはそのよりも少し前の記述がとても気になる。山田晶先生訳によると、次のような部分である。

「そこで私がどのような学問上の仕事をしたか、それはもはやあなたに仕えるものではありませんが、しかしあなたも断末魔の息をつくように傲慢の学派を吐いていたことは、そこにいあわせた人々で行った討論の書と、御前に書いて私が見ただ一人自分自身とした討論の書とが証明するところでは（*Conf. IX, IV, 7*）」この数行の言葉には「ご発表では触れられなかったが、問題は「傲慢の学派 *superbiae schola*」とはいったい何なのか、ということであろう。これははっきりさせなければならぬことだと思われる。このとき、つまり『告白録』を書いている時点では「傲慢の学派」であると彼が思っているところのこれは何なのか、

重要な問題ではないだろうか。これについて、時々「新ブラトン派だ」と言われることがあるが、これは到底信じられない。むしろアカデメイア派であるとか、そのように考えられるが、ともかく『告白録』を書いている時にカシキアム時代を振り返って、彼が「断末魔の息をついていた」と書いているのである。その後、本日本落先生が引かれた「はじめのころアリピウスは、キリストの御名が私たちの著作のうちにはさまれることに反対していました、というのは彼は、私たちの著作の中に、蛇の毒を防御する教会の薬草の香りよりはむしろ、学校の香柏の香りのただよふことをのぞんでいたからです。(X, iv, 7)」という記述がある。私にとってはそこできくつか重なることがある。今日では触れられなかったが、『秩序論 De Ordine』第一巻における、自由諸学芸に関する討論の前半における、とりわけリケンティウスとの間のとても激しいやりとり、あの部分が後半部にどのように響いてくるのか、というのがひとつの問題点である。つまり、ちよろちよると水が流れているのが気になってアウグスティヌスは眠れず、彼は何かを考えざるをえなかった。そしてリケンティウスに対しては、君はムーサに取り憑かれて詩作に夢中になって寝

られなかったのだろうか、と言う、これはかなり皮肉な言い方である。二人とも水の流れる音が気になって、それで眠ることができなかったのであるが、この部分はカシキアム著作の中で喜劇的でもあり、それだけに他の著作に較べても格別にリアリティを有すると言える。そこで詩作に夢中になっているリケンティウスに対して皮肉を言っているアウグスティヌスとリケンティウスとの対比、これは今日のご発表の問題とも重なってくるであろう。

この『秩序論』後半の討論部分において際立つアウグスティヌスとリケンティウスとの乖離というものがあって、そしてそこに「涙と祈り」という言葉が出てくる。この「涙と祈り」というものが、自由学芸の展開の中ではどのように響いているのだろうか。特にここでは、その後『自由意志論』で展開されるような悪の問題が中心になってくる。リケンティウスは簡単に説明するけれども、アウグスティヌスはそれでは我慢できず、「悪はどうしてあるのか、どうして秩序の中に入ってくるのか」ということが最大の問題になるわけである。これは自由学芸(ウァロのものにしても)の中で、果たして主題化できていたのだろうか。こういったことが、カシキアムに籠もっていた時

代に、すでにアウグスティヌスの中で問題になっていたとすると、本日のご発表にあったような事柄に、もちろんアウグスティヌスは取り組んでいたのだけれども、彼は実はとても悩み始めていたのではないだろうか。

先に問題にした『告白録』第九巻第四章 (IX, iv, 7-12) は、ほとんど「詩篇」第四篇の註解と違ってよいのだが、カシキアコム時代、アウグスティヌスはすでに詩篇を読み始めていたのでないか、というのが私の解釈である。アンブロシウスに手紙で尋ねると「イザヤ書」を読めと言われ、「イザヤ書」を読んでみたがついていけずに投げ出してしまった、とアウグスティヌスは述懐するのだが (IX, v, 13)、これは虚構であろうか。これはかなり大きな問題だが、私には虚構ではないと思われるのである。カシキアコムでは、実際にはのんびりと暮らしているが、彼自身は涙を流したり祈ったりしつつ夢中になって、悪の問題をどのように秩序の中に組み入れるか、という非常に大きな問題に取り組んでいたのではないか。このことはウァロの自由学芸では解決できない問題としてすでに伏在していて、それゆえ、その後の『教師論 *De Magistro*』や『自由意志論 *De Libero Arbitrio*』へと展開してゆく出発点が、カシキア

コム生活の中にあつたと言えるのではないだろうか。

そしてこのことは、彼が弁論術の教師を辞めたのはなぜであつたか、ということと大きく関係してくるであろう。これは根本的な問題である。つまり、今日教えていただきたいリケンティウスのその後の生涯と考え合わせると、アウグスティヌスはなぜ、リケンティウスのような道、すなわちキリスト教徒としてミラノの宮廷において高い地位につくこと（立身出世の道）を選ばなかったのか、ということである（リケンティウスの詩ほどのものであれば、アウグスティヌスならば難なく書けたはずである）。こういったところに問題は収斂してくるように思われる。

それから、「三九五年」という「書簡二六」の年代の実証性は、何に基づいているのだろうか、という問題がある。三九五年というと、アウグスティヌスが叙階される前後ということになる。特にこの中でリケンティウスに対して繰り返し「パウロを読め」と言う、これは完全に『告白録』のアウグスティヌスであると言うことができよう。そのあたり、この書簡の年代の実証性がいったいどこにあるのかということが、私にとっては少なからぬ問題でもある。

このことも含めて、アウグスティヌスがなぜ弁論術の教

師を辞めたのか、胸の病で喉が痛くて……というのは口実にすぎない、ということもあろうし(クールセルなどは三つほどの可能性を挙げているが)、この点は根本的な問題に関わると思われる。

以上、「傲慢の学派」とは何であるかということ、それから『秩序論』において、アウグスティヌスの「涙と祈り」とリケンティウスとの間に開きがあるということは何であったのか、という点について、ご意見を伺いたい。

水落 健治

『秩序論』だけではなく、たとえば『幸福な生 De Beata Vita』などを読んでも、幸福について議論をしていて突然涙が流れて話が中断した、といったことが見られる。実は本日は、私自身はこういった点についてはむしろネガティブに触れたつもりである。つまり、自由学芸という話を話の前面に出して、カシキアコムでアウグスティヌスは毎日祈っていた「けれども」……、という方向で話を進めたのである。しかし、『秩序論』や『幸福な生』など、先ほど挙げたような箇所を参照し、また加藤先生のご指摘に触発されて私の中に浮かぶのは、いくつかの「意識

の層」があるのではないか、ということである。

加藤 信朗

確かに「そうだ」と思われる。

水落 健治

ただ、意識的な層、意識的な部分では、やはりアウグスティヌスは、頑張って自由学芸について論じようとしたのだと考える。

加藤 信朗

たしかにそうでなければ、なるほどウエルギリウスなどを読んだりはできないだろう。

水落 健治

意識の部分では、そういったところを突き進んで行こうというプログラムを考えていたはずである。それは今日、私が明らかにしようとしたとおりである。ただもちろん、アウグスティヌスの中には、カシキアコム対話編を読んでみても、そのような事柄だけに収まりきれないものは絶対

にあって、それは今のご指摘のとおりであろう。アウグステイヌス自身が意識してこういったプログラムを考えていた、という部分と、彼が「ミラノの体験」(『告白録』による)を実際にしたとするならば、その余韻のようなものが初期のカシキアコム対話篇の中にもあることは確かだ、と私も思う。ただし、そういった回心的な体験がアウグステイヌスの中にあつたとしても、それをどのように意識化するか、という視点が、まだ彼の中にはなかったのではないか、というように私は考える。

それから、リケンティウスについては、たとえば詩篇のどこかの韻律がとても面白くて、そこばかり洗面所で唱えていた、というエピソードがあるが……。

加藤 信朗

私にとつてもあの箇所は印象的である。それでリケンティウスはモニカに怒られてしまうのだった。それは東方的なリズムであつたと言われている。アンブロシウスが取り入れた東方的な典礼の香りがあつたらしいが、そういうことはリケンティウスにはわかつていない、というわけである。

水落 健治

ともかく明らかに、アウグステイヌスはカシキアコムで詩篇を読み始めていたはずである。そういった意味で、無意識の内にはキリスト教的な根源体験のもとに福音書につながる詩篇のようなものも読んでいたし(一方リケンティウスは、その韻律的な部分が好きで好きで何度も声に出して怒られた、などという事実と)、意識の表層として(自由学芸についての議論の)プログラムを形式的に組んでいく、といったものが同時に存在したのではないか、という気がする。

アウグステイヌス自身の体験が特殊なものとしてあつたとしても、やはり意識的には後者のほうがはっきりと前面にあつたのではないだろうか。

加藤 信朗

三九五年の書簡でアウグステイヌスは「パウロを読め」と繰り返し言っている。『告白録』によると(第七巻でも第八巻でも)、パウロを読んでもわからなかったが、しかしそこにさっと光が射し込んだ、と記されている、これが回心の最終的な体験なのである。この書簡で言われている

パウロについて考えるとき、カシキアクムの時代と三八六年の回心という事態とを考え合わせても、三九五年という年代は非常に重要なものとして気になってくる。

これらの問題は、すべて『告白録』の問題性に還ってくるであろう。この書簡でリケンティウスが「教えてくれ」と頼んでいるのに対して、アウグスティヌスは「自分に訊くよりもパウロを読め」と言っているのだから。

水落 健治

私自身が発表の最後で提起した問題に関しては、「意識の層」という視点で少し明確になったと感じている。

佐藤真基子

アウグスティヌスが自由学芸のひとつにフィロソフィアを入れた、ということをたいへん興味深く感じた。フィロソフィアというものが「物体的なものから非物体的なものへ」という変化に関してどのような役割を果たすのか、ということを知りたい。

水落 健治

つまり、アウグスティヌスが言うフィロソフィア（哲学）とは『ソリロクィア Soliloquia』の中で言われる「魂と神について知る」ことを目指す、ということと、フィロソフィアが知ろうとするのは非物体的なものであるから、という、比較的単純な図式を今のところ考えているのだが。

佐藤真基子

その前の段階までが、物体的な六つの学で、フィロソフィアだけが違う、ということになるのだろうか。

水落 健治

順番としては最初は文法学から始まるのだが、『秩序論』を見ると、実際には物体的なものの中に現れる非物体的なものを探り出す、という構図になっている。

佐藤真基子

それでは、他の六つの学の中で物体的なものから非物体的なものを探り出すのが哲学である、ということだろうか。

水落 健治

そうではなくて、むしろ物体的なものの中にある非物体的なものが、そういった諸学芸を学ぶことによって見えてくるということではないか。

佐藤真基子

ということとは、自由学芸の段階とは、順番にやっていくということではない、ということになるのでは……。

水落 健治

たしかに時間的な順番・段階ではないと思う。実際にはカシキアコムでは自由諸学芸についていろいろ並行してやっていて、それを「事柄の秩序」として理論化した、ということではないだろうか。現実には順番にやっていく、というのは無理であろう。たとえば文法学にしても修辞学にしても、何年か何十年かやってそこで終わり、というような段階はない、と言わざるをえないのであるから。

私は以前オックスフォードで『問答法について De Dialectica』について、dialectica における非物体的なものに関して、アウグスティヌスは具体的にはメタ言語の問題

とか自己指示の signum といったところに論をもっていくのではないか、という研究発表をしたことがある。少なくとも自由学芸とは、「これをやったら次はこれ」というようなものではないと思う。

柴田 有

キケロの『雄弁家論』という著作では「雄弁家とは、どれだけ学芸を身につけていなければいけないか」という話が延々と続くが、すべてやるのはいへんだから四学科にしようか五学科にしようか、歴史学は入れるか否か、などという議論がある。そういう学科をいろいろと学ぶわけだが、その全体をひとつのものとしてつなぐようなものが見方ができなければいけない、それを「教養」と呼ぶということである。その教養と呼ばれるものを「哲学」と置き換えてみると、キケロの場合には哲学とは、諸学科を通じて統一的な視点を見出す探求、ということになるが、今の水落先生のご説明によると、『秩序論』の場合は、学科ひとつひとつについて、物体的なものの中に非物体的な意味を汲み出すことができるような思考法、視点を身につけるのが哲学であるように思われるが。

水落 健治

哲学は「諸学芸の環を完成する」と『秩序論』では言われている。

佐藤真基子

「ディアレクティケー・問答法」についてだが、たとえば『教師論 *De Magistro*』では、問答を通して最後に「わかった」というところまで行くことができるのに対して、『秩序論』では何人かで問答してはいるが、「リケンティウスにはわからない」というところでアウグスティヌスも諦めているように思われる。実際、『再考録 *Retractiones*』でも、「途中から自分で話すことにした」といった記述があったが、それについてはどうか。

水落 健治

だから、「学問の秩序」に話が変わるのではないか。

佐藤真基子

つまり行き詰まってしまおうということは、そのことよってアウグスティヌスは問答法自体に限界を見出している、

ということになるのだろうか。

水落 健治

「ディアレクティカ」をどう捉えるか、すなわち『秩序論』で為されているのはほんとうにディアレクティカであるか否か、という問題になるが、私はそうではない、と思う。「ディアレクティカ」とは、ストア系統の明確な学問的伝統を有するひとつの学科としてアウグスティヌスは理解していたはずである。論理学のようなものである。だから、ここで「問答法」と訳してよいのかどうか（以前、私も別の訳語を使っていたが）、ということも問題になろう。ストア派の文脈では、プラトンのないわゆる「ディアレクティケー」といったニュアンスも含みつつ、それに論理学も入ると言うことができる。そのため「ロギコン」を「言葉の学」、その中のひとつとして「ディアレクティケー」を「問答法」と訳してみたのである。しかし、アウグスティヌスの「ディアレクティカ」とは、やはりそこに基本としては論理というものが中心にある、と言えるであろう。（今日の話からは少し逸れるが）『問答法について』の最初の部分に「論理学の区分」について書かれているが、やは

りそういった区分や構想を見ても、推論や、誤謬をどのようにして防ぐか、といった話が基本であると言いうことができる。

ここで、アウグスティヌスが亡くなった後、彼について「Augustinus Dialecticus」という呼称が残ったという事実がある。これは大きな意味があるとも言えるが、そのことと、アウグスティヌス自身が狭義に考えている「論理学者」というものとは、やはりちょっと違う、という気はしている。

少なくともこの時期の「ディアレクティカ」とは、いわゆる「論理学」であると捉えていい、と思われる。

加藤 信朗

今のご質問に関連し、また私の中に触発されて生まれた問題がある。アウグスティヌスが「ディアレクティクス」と呼ばれていた、ということは初めて伺ったが、これにはなるほどと思わせられる。実際にここでの問答が「ディアレクティカ」なのか、あるいは、しかしそれが最終的に行き詰まるということ、これらがとても重要であるように思われる。アリストテレスの言うところの「ディアレクティ

ケー」とは、そこにある「考え」、すなわちそれ自身が確実ではないものから出発する。このやり方は、「あなたは秩序をどう考えるか」で始まる『秩序論』そのものの構造である。その意味では、これはまさに「ディアレクティカ」であると言える。つまり、アリストテレスが定義するような場所から始めて、それが最終的にアポリアに陥るのである。そのようなものをアリストテレスはほんとうの学問とは考えなかったのだが、ここで問題の場所をプラトンの場合に移して考えると、問いが再び還ってくるという意味で、「Augustinus Dialecticus」という呼称はとても興味深い、面白い、と感じられる。

それからもう一点は、ディアレクティカとレトリカについてである。ディアレクティカはむしろレトリカによって完成され、そしてフィロソフィアが最後になると言われるが、このことは私に、アウグスティヌスとファウストゥスとの出会いについて思い起こさせるものである。ファウストゥスという人は、レトリカに長じていたが、しかし彼は自分が知らないということを確認するのを恥とはしなかった、と言われている。アウグスティヌスのこの記述は、「真のフィロソフィア」につながるものとして非常に根本的なも

のではないか、と思われる。だから、ここでむしろ教科書的な意味でディアレクティカを整理することと、ディアレクティカそのものが生きて働いている場面での、まさに「ホモ・アウグスティヌス・ディアレクティクス」との対比を鮮明に感じさせられた。

水落 健治

私は最近アウグスティヌスについて、これまで言われてきているようなプラトン（新プラトン主義）との関わりだけでなく、アリストテレスの影響がとても大きいのではないか、という気がしてきている。今の問題もそうだが、

『問答法について』について言うと、研究史的にこの著作はストア派的であるという意見が席捲した時期があったが、根本的な枠組みとしては、これは絶対にストアではない。なぜなら、ストアの言語理論はセンチンスを単位としているのであって、主語と述語が結合されるとか結合されないなどといった、単語が単位の話はストアでは出てきてはいかないからである。しかしこの著作では「主語・述語」といった品詞論に話をもっていく、すなわち基本的には『問答法について』はむしろアリストテレス的であるとと言える。

そうなってくると、『魂の不死』における *substantia* 論などにもつながってくるのではないか、と思っている。

上村 直樹

まずカシキアクムでの生活について、「自由な閑暇 *in un liberum*」ということが言われたが、この語は註によると「なかば熟語となっていたようである」とある。確かにそのとおりであるが、この *otium* について考えるとき（確か書簡一〇もそうであったが）これは「*deificare* 神化」論につながっていて、それは東方の伝統とも関わってくると言われているけれども、「神化」の問題についてはどのようにお考えか、伺いたい。

水落 健治

これはとても大きな問題であろう。

上村 直樹

ご発表の後半では、リケンティウスの詩について詳細に述べられているが、リケンティウス自身は、カシキアクムの閑暇を共有した一人として、たとえばそこにコミットする者として回想して詩を書いている、ということが言える

のだろうか。

otium liberum の中でこういった自由学芸に沈潜し鍛えられることによって、精神が純化されて「神に似たもの」になってゆくということはあろうが、このような「自由な閑暇」について考えるとき、そのような生活を送ること自体が目的であるということではなくて、むしろそういう生活を送ることによって自分が変わりたい、ということが言えるのではないだろうか。その大事な目的として「deification 神化」というものがあるのではないか、と思われるのだが。

水落 健治

その脈絡で言うと、まず『ソロクイア』が思い起こされる。『ソロクイア』では、ratio 理性とアウグスティヌスが対話をするわけであるが、その中で最初に「私は神と魂を知りたい」という言葉が出てきて、そのために理性と対話を重ねてゆく。たとえば様々な認識の仕方、幾何学における確実な知識についてなどの省察を経て、それなら幾何学のような確実な知識を神を知ることについて得たならばそれで満足であろうか、とアウグスティヌスは自己対

話するのである。しかし彼は、「私は神を知る知り方が幾何学の知識を得る仕方と同じであるとは思えない」というように答える。この『ソロクイア』は、カシキアコム対話編のひとつである。すなわちカシキアクムの時点でアウグスティヌスはそのような考えを持っていたのだと私は思う。端的に言うと、つまりそれほど樂觀的ではなかったのではないか、ということである。ある種の確実な知を、幾何学の知識のようなものに認めてはいるが、そういった知識と「神を知ること」とは同じではない、と、彼は初期の段階からそう思っていたはずである。

先ほど深層と表層といった層の違いが話題になったが、こういったところにそれが表れていると言えるのではないだろうか。同じカシキアコム対話編においても、『ソロクイア』ではこのようなより深い層として現れてくる、しかしそれはまだプログラム化されてはいなかった、というように言えるのではないか。

『魂の不死』では、アリストテレス的なところから魂の不死を論証しようとするが、結局あれは未完のままに終わってしまっただけで、このこともまたある意味では、表層の部分で頑張ろうとするのだがそれは違う深層との関わりに

おいてうまくいかない、ということなのかもしれない。

又野 聡子

『ソリロクシア』においては、たとえば確実な知識として知ることのできる幾何学の知、そのようなものとして何かを知ることと、「神を知ること」とは違う、と、はっきりと言われるわけであるが、「神と魂を知りたい」というのがフィロソフィアの内実であるとするならば、「自由学芸の環を完成させる・統べるものとしてのフィロソフィア」とは、いったい他の自由学芸に対してどのような関わっているのか、どのようなものとしてフィロソフィアがあるのか、疑問が残る。

水落 健治

つまり、フィロソフィアにある種の超越性がある、ということであろうか。

又野 聡子

そのとおりで、だとすると、単なる段階として昇っていったその最終段階でフィロソフィアに到達する、ということ

にならないのは当然なのであるが、それならば「どこで、どのように」フィロソフィアは他の学と関わることになるのだろうか。

水落 健治

おそらくそれが、その後問題になっていった、顕在化していった、ということではないだろうか。これまでの討論に触発されて、ますますそのように感じるようになった。

又野 聡子

その後徐々に顕在化していったということなのか、もしかするとこれこそが、すでにしてカシキアタムの端緒であった、とは考えられないだろうか。

水落 健治

そうであれば、アウグスティヌスはこのようなプログラムは考えないのではないか、と私は思う。むしろそうではないところがいちばんの問題なのではないか。

又野 聡子

複数のいろいろな人々と共同生活をし、同じ探求をしてゆくためには、ともかくも外的に何らかのプログラムが必要であった、ということにすぎない、とは言えないだろうか。

水落 健治

むしろその時点では、おそらくアウグスティヌスもそれしか考えていなかったのではないか。それは彼自身が受けてきた教育にも関係しているわけで、その意味では聖書を読んだとはいっても、「キリスト教教育のプログラム」といったものは、アウグスティヌスは知らなかったのではないだろうか。

又野 聡子

そのようなものとしてのプログラムでないことは確かであるが、フィロソフィアが七自由学芸のうちの単なる七分の一ではありえないとすると、アウグスティヌスは、カシキアクムの時点ではフィロソフィアをどのようなものと捉えていて、そして彼自身はそれを共に在る人たちとどのよ

うに分かち合おうとしていたのか、それがやはり気になる。

水落 健治

今とりあえずお答えできるのは、『告白録』からになってしまいが、いわゆるホルテンシウス体験において「真理に燃え上がった」と言われる、そのようなところで彼はフィロソフィアを考えていたのではないか、という気がする。当然ながらカシキアクムのプログラムで自由学芸ということを言うわけであるから、それぞれの学科における上昇のモチベーションといったものはあつたはずである。

柴田美々子

アウグスティヌス自身は自由学芸をずっと大切にしてゆくが、たとえば『キリスト教の教え』では、自由学芸の知識はあつたほうがよいが、それにわざわざ多くの時間を費やす必要はない、といった考えを述べる。「自由な暇な時間」ということを考えたとき、フィロソフィアについてなすべきことの変化、生活の変化、といった要因は、それとどのように関わってくるのだろうか。

水落 健治

実を言うと本日の発表は、私が今書いている著書の手始めの部分に当たるのだが、新しく見つけた書簡として、本文ではもうひとつ別なものも扱っている。それはアウグスティヌスの晩年、すでに恩恵論という神学論争も終わりが彼が権威になってしまつてからの書簡で、ある人が、自分の息子のことを彼に相談にくる場面である。その際、その人は息子のことを Graecus と呼んでいる（ローマ人であるのに）。そしてその息子がレトリックの勉強をしているが、そんな世俗的なことばかりやつていても仕方ないからどうしましよう、とアウグスティヌスに尋ねるのである。それに対して、絶対恩寵論の神学論的権威としてはすでによく知られたアウグスティヌスが、「そんなにキリスト教のことばかり勉強しなくてもよい、キケロを勉強しなさい」と助言するのである。私にはそれがとても印象的で（ピーター・ブラウン氏もこの書簡を採り上げている）、アウグスティヌスは現実問題としては教会の中樞の非常に忙しいところに追い込まれていったわけだが、しかし著作に関しても、ひょっとしたら彼は、自由学芸についての著作も『音楽論』だけでなくその続きを書きたかったのかもしれない

ない、と思うときがある。でも現実には書けなくなつてしまったのである。しかしだからといってアウグスティヌスの精神が教会の中だけに矮小化していったのかというと、私は決してそうではないと思うのである。彼はもつとものと広い人で、けれども現実には教会の中で煩雑な仕事をたくさん与えられて、書いたものとしてはそのことしか遣せなかった、そのような人ではないか、と思うのである。だから、「閑暇」の話にしても、単純にアウグスティヌスが忙しいからそのように言うのだ、という気もする。

それから、久山道彦先生がかなり以前「オリゲネスの懈怠論」について、オリゲネスが人間の墮落ということを考えるときに「懈怠」という言葉を使う、と書かれたことがある。オリゲネス自身は東方の人だから状況はかなり違ふかもしれないが、もしかするとアウグスティヌスとそのような伝統との接触もあったのではないか、そのようなことも考える。

柴田美々子

本日採り上げられた『書簡一二*』について、これを書いた人（コンセンティウス）はむしろ『告白録』の熱心な

読者なのではないか、という印象を受けた。つまり十二年前に『告白録』を買ったが放置していた、そこには「厭わしい輝き」を感じた、とあるが、これは「病んだ眼には光が厭わしい」という、『告白録』からの引用ではないだろうか。書簡の時点ではアウグスティヌスを尊敬し訊ねたいことがあるわけだが、いずれにしても『告白論』に嫌悪感を覚えているというよりは、むしろ高く評価しているのでは、とも考えられる。

水落 健治

その可能性はじゅうぶんにあるが、実はさらに複雑かもしれない。というのは、この書簡の時点ではアウグスティヌスは大いなる権威なのである。激しい神学論争も終わって、その名はヨーロッパ中に鳴り響いている、と言ってもよい。そしてこの書簡は、一貫して「偉い人に向かって書いている」という論調である。だから、その文脈において『告白録』の引用をしている、という可能性もある。本日の資料で訳出した部分だけを見ても、かなり複雑な感情を見ることができる。この人の本音がどこにあるのか、本当に『告白録』への嫌悪感が消えたのか、疑問は残るのでは

ないか。引用の仕方でも複雑で、相手は偉い人だから嫌いだけれどその著作の言葉を使って綴った、ということも考えられる。

ただ少なくとも、「『告白』と他の著作」という表現は注目されてよいだろう。わざわざ『告白』の書名を別に挙げているからである。

柴田美々子

私には、それでもこの人は『告白録』を書簡の時点ではとても大切にしていたように思われるが。

水落 健治

今後、検討しておく。具体的な引用については細かく見てゆく必要があるかもしれない。

柴田 有

「物的なものを媒介にして非物的なものへ」という、いわば哲学の「標語」は、もちろんアウグスティヌスの発明ではなくていろいろなところに出てくるはずである。フィロンの場合は自由学芸というよりも、「論理学・自然学・

倫理学」というストア派の学問の三分野を基本として論じるのであるが、それでも「自然学という眼に見えるものを媒介として、倫理学という人間の眼に見えない徳を目指す学問へと上昇してゆく」というのが目標であると言える。自然界のノモイ（法）と倫理学のノモイ（これはモーセの律法に尽きるのだが）とが、ひとつのものに収斂してきて、そこで「神の探求」への道が開けるはずだという、そのような構造になっている。それでは、どうして自然界のノモイがモーセのノモイに変換しうるのかというと、フィロンの場合には一貫して「アレゴリア」による、ということになる。これは今日の自由学芸の話とはちょっと違うように思われるが、アウグスティヌスにも「アレゴリア」という解釈法はあるわけで、そのあたりをどのように考えたらよいだろうか。

水落 健治

今言われたフィロンのプロセスは、ストア派の枠組みを使っているが、実際のストア派の説とはかなり違うと言わざるをえない。ストア派であれば（果樹園の譬えなどと言え）、入り口は三つあるがどこから入ってもいい、と

というのが基本的な考え方であるから、そこに順番性といったものはない、と言うべきである。つまりそれは、フィロンがストア派の枠組みを使いながら、どこかプラトンの（中期プラトン主義かもしれないが）変化させている、ということになる。この問題と「アレゴリア」ということになる、これはとても難しい。

宮本 久雄

「非物体的なものの発見のために、まず物体的なものに専心する」ということは、物体的なものの中に非物体性を示すような何かを見つけてゆくということになるのだが、たとえば近世のガリレオにしても、自然の中の様々なものを量化し法則化していった「自然法則」という形にしてゆくわけである。自由学芸の場合、幾何学・数学・天文学・音楽学など、必ず数学的なものが手がかりとなるのだが、それが必ずしも超越的なもの・神に向かうとは限らず、宇宙全体の法則といった自然科学的なものへと向かう可能性はいくらでもあるはずである。つまり質問のひとつは、物的なものの中の非物体対なものへと導くものとして、数的なもの以外のものと根源的なものが何か考えられていた

のか、ということである。

水落 健治

それについては先にも少し議論したが、『ソリロクイア』の中でアウグスティヌス自身が幾何学的な知識と「神を知る知り方」とは全く違う、と述べているように、彼は必ずしも幾何学的・数学的な知を導き手としてはいない、と言うことはできると思う。

宮本 久雄

「物的なものに専心することによって非物体対なものへ」ということに関しては、ある意味では自然科学もやっていることだと言える。それを「神のほうへ」と言うときに、そこにいったいどのような契機が考えられているのか、ということである。

水落 健治

今日は、「カシキアクムの時点では、アウグスティヌスはまだそこまで行っていなかったのではないか」というのがそもそもの話題であり、それを表層と深層という言い方

をしたのだった。アウグスティヌスの中に回心の根源的な経験があったとしても、まだそれは彼自身にとってもプログラムとして組み込むことはできなかったのではないか、ということである。

宮本 久雄

つまり、まずは「啓示」というようなものを取り払ったところで考えている、ということになるのか。自然神学的に物体の中の自己超越的な契機（ひとつには幾何学的なものと考えられるが）を認める、というだけではどうにもならない、ということであろうか。

水落 健治

そういうことになる。しかしそうになると、先ほど上村さんがおっしゃった東方神学の問題なども考え合わせる必要があると思われる。

宮本 久雄

たとえば『音楽論』に結晶化するような（あるいは、ピタゴラスであれ）、やはり何か「数」を神的と考える伝統

があるが……。

水落 健治

アウグスティヌスでも『秩序論』では、「ほとんど神的な説」としてピタゴラスが語られている、ということがあ
る。

宮本 久雄

その場合の「神的」ということについて、たとえばタレスなどの場合「第一元素」が水であるとか何とか言うときには、それは神的なものだと言う。であるから、啓示的な神にまでは行かないにせよ、自然神学的な或る手がかりというものを考えるとき、古代人のメンタリテイにおいてそういう「数」というものを「神的なもの」などと名付けること、そのことと近代の自然科学との、ある落差があるのではないか、と……。それはアウグスティヌスの中でどうなっているのだろうか。すなわち、「啓示」抜きで彼がカシキアクムのプログラムを実践したとしても、古代の精神性を考えるとき、それは彼らの中でどのように捉えられていたのだろうか。

水落 健治

ご質問の深意がよりはっきりしてきた。……にしても、難しい問題ではある。

宮本 久雄

だから、むしろフィロンのように「アレゴリア」を用いると、或る意味では非常に大きな飛躍ができるのだが。

柴田 有

その代わり、「アレゴリア」ということでゆけば、アンティオキアの教父たちが批判したように、まったく恣意的なもの何の根拠もないものという評価を受けかねない。アレクサンドリアでは、「アレゴリア」という解釈の仕方はとても強いということが出来る。

宮本 久雄

これらはすべて同じ問題であろう。文法学をやっていて、しかもアレゴリーに行かずにどうやって超越的なものを見出してゆくか、という……。

水落 健治

たしかにそのとおりであろう。しかし私は、アウグスティヌスの言語理論は或る意味で基本的にはとても合理的であるという気がしている。「アレゴリア」という語を使わずに(たとえば『キリスト教の教え』であつたか)、「*translatio*」という言い方をするが、そこには「指示する *significare* の連鎖」というものが明確な形で考えられているのだと思う。「あるものが何かを *significare* し、それがまた何か別のものを *significare* する」という、非常に合理的な仕方です。語られているのではないか、という気がするし、フィロンなどがやるうとしていないことはかなり違う、と考えている。

私は以前、フィロン翻訳のプロジェクトに関わっていたことがあって、フランスのカゾーという人の研究を紹介したこともあったが、彼の説によると、フィロンは、ある話をしたのち何十頁も別の話をした後に最初の話に一気に戻ってきて、別の話であると思われるものがすべてアレゴリーであった、というような(カゾーによれば「網のテクニク」と呼ばれるのだが)、様々な話をすべて引き上げてそれをアレゴリアである、というような側面があるように感じられる。

アウグスティヌスは、そのようなものとはずいぶん違うものだと考えている。

柴田 有

かなり以前にプトレマイオスの天文学を読んだことがある(飽きてすぐに投げ出した)が、最初のところに、これは天体の世界のことを知るのがひとつの目的ではあるのだが、ほんとうの目的は神的なものを知る、天文学を通じて極限であるところの神的なものを知るべきだ、という言葉を見てとても驚いたことを思い出す。

第一一八回教父研究会

(二〇〇六年十二月九日 於明治学院大学)

司会者 柴田 有 (明治学院大学)

発表者 水落 健治 (明治学院大学)

発言 加藤 信朗 (東京都立大学名誉教授)

佐藤真基子 (慶應義塾大学)

上村 直樹 (国際基督教大学)

又野 聡子

柴田美々子

宮本 久雄 (東京大学)